

大捕物仙人壺

国枝史郎

青空文庫

女軽業の大一座が、高島の城下へ小屋掛けをした。

慶応末年の夏の初であつた。

別荘の門をフラリと出ると、伊太郎いたろうは其方そっちへ足を向けた。

「いらはいいらはい！ 始まり始まり！」と、木戸番の爺おやじが招いていた。

「面白そうだな。入つて見よう」

それで伊太郎は木戸を潜つた。

今、舞台では一人の娘が、派手やかな友禅の振袖姿で、一本の

綱を渡っていた。手に日傘をかざしていた。

「浮雲あぶない浮雲い」と冷々しながら、伊太郎は娘を見守った。

「綺麗な太夫たゆうじゃありませんか」

「それに莫迦に上品ですね」

「あれはね、座頭の娘なんですよ。ええと紫錦しきんとか云いましたっけ」

これは見物の噂であつた。

小屋を出ると伊太郎は、自分の家へ帰つて来た。いつも物憂わそうな彼ではあつたがこの日は別けても物憂わそうであつた。

翌日また復も家を出ると、女軽業の小屋を潜つた。そうして紫錦の

綱渡りとなると彼は夢中で見守つた。

こういうことが五日続くと、楽屋の方でも目を付けた。

「オイ、紫錦さん、お芽出度うめでと」源太夫は皮肉に冷かした。「エへ、お前魅みいられたぜ」

「ヘン、有難い仕合せさ」紫錦の方でも負けてはいない。「だが

チヨイと好男子いいおとこだね」

「求もとめがた型かたという所さ」

「一体どこの人だろう？」

「お前そいつを知らねえのか。——伊丹屋いたみやの若旦那だよ」

「え、伊丹屋？　じゃ日本橋の？」

「ああそうだよ、酒問屋さかどんやの」

「だって源ちゃん変じやないか、ここはお前江戸じやないよ」

「信州諏訪でございます」

「それだのにお前伊丹屋の……」

「ハイ、別荘がございます」

「おやおやお前さん、よく知ってるね」

「ちよつと心配になったから、実はそれとなく探つたやつさ」

「おや相変らずの甚じんすけ助かえ」紫錦ははすつぱに笑つたが「苦勞

性だね、お前さんは」

「何を云いやがるんでえ、篋べらぼう棒め、誰のための苦勞だと思ふ」

「アラアラお前さん怒つたの」

面白そうに笑い出した。

「おい紫錦、気を付けろよ、いつも道化じやいねえからな」

「紋切型さね、珍らしくもない」

紫錦はすつかり嘗めていた。

ところでその晩のことであるが、桔梗屋きぎようやという土地の茶屋から、紫錦へお座敷がかかつて来た。

「きつとあの人に相違ちがひないよ」こう思いながら行つて見ると、果して座敷に伊太郎がいた。

さすがに大家の若旦那だけに、万事鷹おうよう様に出来ていた。

酒を飲んで、世間話をして——いやらしいことなどは一言も云わず、初夜前に別れたのである。

ホロ酔い機嫌で茶屋を出ると、ぱったり源太夫と邂逅でつくわした。待ち伏せをしていたらしい。

「源ちゃんじゃないか、どうしたのさ」

「うん」と彼イライラしそうに「彼奴あいつだったろう？ え、客は？」

「言葉が悪いね、気をお付けよ。彼奴あいつだろうは酷ひどかろう」紫錦は爪楊枝つまようじを噛みしめた。

「いっつお前お姫様になつたえ」源太夫も皮肉に出た。

「たつた今さ。悪いかえ」

「小屋者からお姫様か」

「そういききたいね、心掛けだけは」

小屋の方へ二人は歩いて行つた。

源太夫というのは通名とおりなで、彼の実名は熊五郎であつた。親方

には実の甥で、紫錦とは従兄弟にあたつていた。

その翌晩のことであるが、また同じ桔梗屋から紫錦にお座敷がかかつて来た。

「行つちや不可いけねえ、断つちめえ」

熊五郎は止めにかかった。

「いい加減におしよ、芸人じゃないか」

紫錦は衣裳を着換えると、念入りにお化粧をし、熊五郎に構かまわず出かけて行つた。

気を悪くしたのは熊五郎であつた。

「へん、どうするか見やアがれ」

恐ろしい見幕けんまくで怒鳴りどな声をあげた。

同じ一座の道化役、巾きんちやく着頭のトン公こうは、夜中にフイと眼を覚ました。

ヒューヒュー、ヒューヒュー、ヒューヒューと、口笛の音が聞こえてきた。

「はアてね、こいつアおかしいぞ」

首むくを擡もちげて聞き澄ましたが、にわかにはムツクリ起き上った。周囲まわりを見ると女太夫共が、昼ひるの劇はげしい労働らうどんに疲労つかれ、姿態なりふり構かまわぬ有様ようで、大鼾いびきで睡ねっていた。

それを跨またぐとトン公は、楽屋梯子ばしごを下へ下りた。

暗い舞台の隅の方から、黄色い灯ひの光がボウと射し、そこから口笛が聞こえてきた。

誰か片手に蠟燭を持ち、檻の前に立っていた。と、檻の戸が開いて、細長い黄色い生物が、颯さっと外へ飛び出して来た。

「おお可よし可いし、おお可よし可いし、ネロちゃんかや、ネロちゃんかや、おお可い子だ、おお可い子だ……」

口笛が止むとあやなす声こゝろが、こゝろ密ひそひそ々と聞こえてきた。フツと蠟燭の火が消えた。しばらく森然しんぜんと静かであった。と、暗い舞台の上へ蒼白い月光が流れ込んで来た。誰か表戸をあけたらしい。果して、一人の若者が、月光の中へ現われた。肩に何か停とまつてゐる。長い太い尾をピンと立てた、非常に気味の悪い獣けものであった。

月光が消え人影が消え、誰か戸外そとへ出て行つた。

「思おぼしめ召しは有難う存じますが……妾わたしのような小屋者が……貴郎あなた

のような御大家様の……」

「構いませんですよ。構うもんですか……貴女あなたさえ厭でなかつたら……

……」

「なんの貴郎、勿体ない……」

紫錦しきんと伊太郎いたろうは歩いて行つた。

帰るといふのを、送りましようと言うので、連れ立って茶屋を出たのであつた。左は湖水、右は榎かりん樫畑、その上に月が懸かつていた。諏訪因幡守三万石の城は、石垣高く湖水へ突き出し、その

南手に聳えていた。城下の燈火は見えていたが、そのどよめきは聞えなかった。

穂麦の芳しい匂がした。蒼白い光を明滅させて、螢が行手を横切つて飛んだが、月があんまり明るいので、その螢火は映えなかった。

「美しい晩、私は幸福だ」

「妾も楽しうござんすわ」

畦道は随分狭かった。肩と肩とを食つ付けなければ並んで歩くことが出来なかった。

いつともなしに寄り添っていた。

やがて湖水の入江へ出た。

「あら、舟がありますのね」

「私の所の舟なんですよ」

「ね、乗りましようよ。妾漕げてよ」紫錦はせがむように云うのであった。「貴郎のお宅までお送りするわ」

それで二人は舟へ乗った。

湖上には微風が渡っていた。櫂かいで砕くだかれた波の穂が、鉛色ひらに閃ひらめいた。水みずどり禽どりが眼まなこざめて騒さわぎ出した。

二人は嬉しく幸福であった。

「さあ来てよ、貴郎のお家うちへ」

そこで、二人は舟を出て、石の階段を登って行った。

木戸を開けると裏庭で、柘榴ざくろの花が咲いていた。

「寄つておいで、構やしないよ」

「いいえ不可いけませんわ、そんなこと」

二人は優しく争つた。

やっぱり女は帰ることにした。一人で櫓ろ権かいを繰あつつて紫錦は湖水を引き返した。

どこか、裏庭の辺りから、口笛の音の聞こえてきたのは、それから間もないことであつた。

「今時分誰だろう？」

楽しい空想に耽りながら、いつもの寝間の離座敷で、伊太郎は一人ふせ臥つていた。

ヒューヒュー、ヒューヒューとなお聞こえる。

と、コトンと音がした。庭に向いた窓らしい。「はてな？」と思つて眼を遣ると、障子へ一筋縞が出来た。細目に開けられた戸の隙から月光が蒼く射したのであろう。

「あ、いけ不可ない、泥棒かな」

すると光の縞の中へ、変な形があらわれた。

長い胴体、押し立てた尻尾、短い脚が動いている。と思つた隙ひまもなくポツクリと障子へ穴があいた。

きつ颯と部屋の中へ飛び込んで来た。

「いたち鼬だ」

と伊太郎ははねお匆起きた。「誰か来てくれ、鼬だ鼬だ！」

ぼんやり点つてともいる行燈あんどんの光で、背を波のようにうね蜒らせながら伊太郎目掛けて飛び掛かつて行く巨大な鼬の姿が見えた。

母屋の方から人声がして、母を真先に女中や下男が、この離はなれへやつて来た時も、なお鼬は駆け廻つていた。

母のお琴はそれと見ると、棒のように立ち縮んだ。

「鼬！」と顫え声で先ず云つた。「口笛の音？ ああ幽霊！」
それからバツタリたお仆れてしまった。

お琴は気絶したのである。

鼬の姿はいつか消え、遠くで吹くらしい口笛の音が、なお幽かすかに聞こえていた。

「わっち私は現在見たんできあ。嘘も偽わりもあるものですかい。ええええ尾つけ行て行きましたとも。するとどうでしょうあの騒動でさ」

樂屋へは朝陽が射し込んでいた。人々はみんな出払っていて、あたり四辺はひっそりと静かであつた。女太夫の樂屋のことで、あけに開荷、いこう衣桁、刺繡した衣裳など、こうしりょうらん紅紫繚乱美しく、色々の物が取り散らされてあつた。

「でも本当とは思われないよ。そんな事をする人かしら？」

「恋は人間を狂きちがい人にしまさあ」

「だつて妾わたしあの人に対して何もこれまで一度だつて……それに妾

達は従兄妹同志じゃないか」

「従兄妹であろうとハトコであろうと、これには差別はござんせんからね。……私わっちはこの眼で見たんでさあ」

「だってそれが本当なら、あの人それこそ人殺しじゃないか」

「だからご注意するんでさあね」

「ただの鼬いたちじゃないんだからね」

「喰い付かれたらそれつきりでさあ」

「恐ろしい毒を持っているんだからね」

「私わっちは現在見たんでさあ。裸蠟燭を片手に持って、ヒューツ、ヒ

ューツと口笛を吹いて、檻からえて物を呼び出すのをね。そいつを肩へひよいと載つけて、月夜の往来へ出て行ったものです。こ

いつおかしいと思つたので、直ぐに後をつけやした。それ私は四尺足らず、三尺八寸という小柄でげしよう。もつとも頭は巾きんちや着くで、ひらつた平く云やア福助ふくすけでさあ。だから日ひのうち中歩ちゆうぽこうものなら、町の餓鬼がきどもが集たかつて来て、ワイワイ囃うるして五月蠅そうござんすがね。折柄夜中で人気はなし、家の陰から陰を縫ぬつて、尾行て行くには持つて来いであ。小さいだけに見付かりっこはねえ。で行つたものでございますよ。別荘作りの立派な家、そこまで行くと立ち止まり、ジロリ四辺を見まわしたね、それから木戸そつを窃そつと開けて、入り込んだものでございますよ。で、しばらく待つていると、そこへお前さんとあの人とが、湖水うみから上つて来たものです。そこで鼬うを放したというものだ」

「でもマア大騒ぎをしただけで、怪我はなかったということだから、妾は安心をしているのさ」

「ところが、あの人の母者人なるものが、気を失ったということですよ」

「まあ、よっぽど驚いたんだね」

「おどろき、梨の木、山椒の木だ。が、ままとにかくもこの事件は、これで納まったというものだ。そこでこれからどうしなさる？」

「どうするってどうなのだよ？」

「一度こつきりじや済みませんぜ」

「じやまたあるとでも云うのかい？ 源ちゃん、そんなに執念深

いかしら？」

「お前さんの遣り方一つでさあ」

「だって妾、これまでだって、随分お座敷へは呼ばれたじやないか」

「それとこれとは異ちがいまさあ。それはそれで金取り主義、ご祝儀頂戴の呼吸いきだったが、今度はどうやらお前さんの方でも、あの青二才に惚れているようだ」

「何を云うんだよ、トン公め！」

今から数えて十六年前、酒商さけしやう伊丹屋伊右衛門いたみやいゑもんは、この城下に住んでいた。

旧家ではあり資産家ではあり、立派な生活を営んでいた。お染そめという一人娘があつた。その時数え年しょうや漸く二歳で、まだ誕生にもならなかつたが、ひどく可愛い児柄こがらであつた。夫婦の寵愛というものには眼へ入つても痛くない程で、あまり二人が子煩悩なので、近所の人が笑うほどであつた。

ところがここにもう一人、藤九郎とうくろうという中年者が、ひどくお染を可愛がつた。甲州生れの遊人で——本職は大工ではあつたけれど、賭博は打つ酒は飲む、いわゆる金箔つきの悪であつたが、妙にお染を可愛がつた。

もつともそれには理由わけがあるので、お染の産れたその同じ日に——詳細くわしく云えば弘化元年こうか八月十日のことであるが、藤九郎の女

房のお半はんというのが、やはり女の児を産んだ。ところがそれが運悪く産れた次の日にコロリと死んだ。それを悲しんで女房のお半も、すぐ引き続いて死んでしまった。さすが悪の藤九郎も、これには酷ひどく落胆して、一時素行も修まった程であった。

ところでこのころ藤九郎は、伊丹屋の借家に棲んでいたので、よく伊丹屋へは出入りした。自然お染と顔を合わせる。子を失った親の愛が、同じ日に産れた家主の子へ、注がれるというのは当然であろう。

しかるにここに困ったことが出来た。

月日が経つに従つて、お染の顔が父親へは似ずに、藤九郎の顔に似るのであつた。

「藤九郎め、好いいおとこ男子だからな」

「そういえば、伊丹屋のお神かみさんは、莫迦に藤九郎めを鼻屑にしたつけ」

「誰の種だか解わかりやしねえ」

世間の人達はこう云い合つた。

しかし真面目な伊丹屋の内儀が、博奕風情の藤九郎などを問題にするはずがない。それは伊右衛門いゑもんも信じていた。で幸いこの事については何の事件も起こらなかつた。

しかし事件はその翌年、すわなちお染の二歳の時に、別の方面から起こってきた。

それは実に嘉永元年夏の初めのことであったが、母のお琴はお染を抱きながら、裏庭の縁で涼んでいた。すると最初口笛が聞こえ、次に鼈いたちが現われた。アツと驚く隙ひまもなく鼈はお染へ噛みついた。幸い手当が速かったので、腕へ歯形が印ついただけで、生命いのちには何の別状もなかった。ところが何と奇怪なことには、その翌晩にも口笛が聞こえ、同じ鼈が現われたではないか。そうして鼈はお染を追って、庭の植込の方へ行つたかと思うと、お染の姿が消えてしまった。

ちようどこの頃城下外はずれに女軽業の大一座が小屋掛けをして景け

気を呼んでいた。女太夫の美しいのも勿論評判ではあつたけれど、四尺に余る大鼈が、口笛に連れて躍るといふのがとりわけ人気を博していた。

それで、自然疑いがその一座へかかつて行つた。官からも役人が出張し、嚴重に小屋を吟味した。しかしお染はいなかつた。誘拐したという証拠もない。どうすることも出来なかつた。

伊丹屋夫婦の悲嘆にも増して、藤九郎の悲嘆は大きかつた。

「彼奴は有名な悪党なんですよ。ええ、あの一座の親方って奴はね。ちよつと私とも知己なんです。釜無の文というんでさ。：ああ本当に飛んだことをした。みんな私が悪かつたんで、つい迂闊り口を走らしたんでね」

彼はこう云つて口惜しがった。

その後伊丹屋では親類から、伊太郎という養子を迎え、間もなく江戸へ移り住んだが、お染のことは今日が日まで忘れたことはないのであった。

「……こういう事情があるのだもの、妾が鼬を恐がつたり、女軽業を憎むのは、ちつとも無理ではないじゃないかえ」

母のお琴は辛そうに云つた。

「だからさ、お前もその意で、そんな小屋者の紫錦なんて女を、近付けないようにしておくれよ。どうぞどうぞお願いですからね」

「だつてお母さん不可ませんよ」伊太郎はやっぱり反対した。

「私は紫錦が好きなんですもの。それにその女は見た所、悪い女

じやありませんよ」

「きつと悪い女ですよ」

「第一その時の女軽業と、今度の軽業の一座とは、別物に相違ありませんよ」

「鼈を使うとお云いじやないか」

「それだつて別の鼈ですよ」

「いいえ同じ鼈です。わたし妾見たから知っています」

お琴は飽く迄も云うのであつた。

紫錦はこれ迄は源げんだゆう太夫を別に嫌つてはいなかつた。しかし今

度の遣り口で、すっかり愛想を尽かしてしまつた。

「甚じんすけ助め！ 飛んでもねえ奴だ！」

そこで、自然の反動として、伊太郎へ好意を持つようになった。その伊太郎は、本来は、小心で憂鬱うちの質たちであつた。朋輩交際つきあいで芸者などは買ったが、深入りなどはしたことがない。それなのに今度の紫錦ばかりは、そういう事にいかなかつた。つまりぞつこん惚れ込んだのであつた。

こういう男女の落ち行く先は、古来往来同一ここんおうらいひとつである。夫婦になれなければ心中である。

驚いたのはお琴であつた。

彼女は窃こっそり訴え出た。「娘を誘拐かどわかした同じ一座が、今度は息子を誑たぶらかそうとします。どうぞお取締まり下さいますように」と。

勿論官では取り上げなかった。しかし全然別の理由から、立退きを命ずることにした。

この一座が掛かって以来、にわか盗難が多くなつて、風紀上面白くない。だから追ひ払おうと云うのであつた。

颯の芸当が人気を呼んでこの一座は評判が可よかつた。で生温い干渉では、引き払つて行きそうには思われなかつた。それに時代が幕末で、諸方には戦争が行なわれていた、官の威光も薄らいでいた。下手をすると逆さかねじ捻を喰らう。

で疾風迅雷的に、やつつけようと云うことになつた。

その夜二人はいつものように、肩を並べて茶屋を出た。

湖上は凄いほど静かであつた。空を仰げばどんよりと曇り、今にも降つてきそうであつた。

伊太郎を家へ送り込むと、紫錦は舟を漕ぎ返した。と、その時雨と一緒に嵐が颯と吹いてきた。周囲四里の小湖ではあつたが、浪が立てば随分危険で、時々漁舟を覆えした。

「これは困つた」と驚きながら、紫錦は懸命に櫓を漕いだ。

次第に嵐は吹き募り、それに連れて浪が高まり、間もなく櫓擱が役に立たなくなつた。

「どうしよう」

と紫錦は周章あわてながらなおしばらくは櫓を漕いだ。

しかし益々風雨は募り、全くシケの光景となり、漕いでも無駄

と知った時、紫錦は舟底へ身を横よこ伏たえた。

「どうともなれ。勝手にしやアがれ」

そこは小屋者の猛烈性で、こんな事を思いながら、案外のんき暢のん気きに寝そべっていた。

「ご大家様のお坊ちゃん、今こそ妾わたしに夢中になって、夫婦になるの駆落しようのと、血道をあげているけれど、その中うちきつと厭になるよ。そうしたら捨てるに違いない。捨てられたら元々通り小屋者の身分へ帰らなけりやならない。いつ迄も小屋者でいるくらいなら、死んだ方が増じやないか」

雨と泡沫しづぶきで彼女の体は、漬けたように濡れてしまった。

「おや」

と彼女は顔を上げた。空が俄かに赤くなつたからで、見れば遙か町の一点が、焰を上げて燃えていた。

「おやおやこんな晩に火事を出したんだよ。何て間抜けな人足だろう。アラ、驚いた、小屋じゃないか！」

まぎ
正しく火事を出したのは、女軽業の掛小屋であつた。

役人達が遣つて来て、立退きを命ずると、急に彼等は周章あわて出した。そうして役人に反抗し、突然小屋へ火を掛けた。これには役人達も驚いたが、しかし事情はすぐ解わかつた。この時代の小屋者の常で、彼等は反面、賊でもあつた。で盗み蓄めた品物が、小屋に隠されてあつたのである。

つまり贓物ぞうぶつを焼き払い、証拠を湮滅させようため、わざと小屋へ火を掛けたのであった。

それと感付くと役人達は、がぜん態度を一変させ、彼等を捕縛とらえようと犇ひしめいた。

彼等は男女取り雑まぜて三十人余りの人数であつた。それに馬が二頭いた。それから白という猛犬がいた。それから例の鼬がいた。これらのものが一齐に、役人達に敵対した。彼等は武器を持っていた。商売用の刀や匕あいくち首や、竹槍などを持っていた。

どんなに彼等が凶暴でも、三十人こつきりであつたなら、捕縛えるに苦勞はしなかつたらう。しかるにここに困つたことには味方する者が現われた。

当時諏訪藩は佐幕党として、勤王派に睨まれていた。で安政^{あんせい}年間には有名な水戸の天狗党が、諏訪の地を蹂躪した。又文久年間には、高倉^{たかくら}三位^{なの}と宣る公卿が、臈^{なつ}勅使として入り込んで来た。勝海舟の門人たる相良^{さがら}惣蔵^{そうぞう}が浪士^{ひき}を率い、下諏訪の地に陣取つて乱暴したのもこの頃であつた。

それで、この事件の起こつた時でも、勤王派の浪士達が、様々の者に姿を窺^{やつ}し、城下の諸方に入り込んでいたが、これが小屋者の味方となつて、役人方に斬り込んだ。

それに城下の町人達の中にも、味方する者が出来てきて、石礮を投げ出した。

事態重大と見て取つて、城下からは兵が出た。

内乱と云えばそうも云え、市街戦と云えばそうも云える。思いも由よらない大事件が、計らず勃発したのであった。

城兵かそれとも浪士達か、鉄砲を打ち出したものがあつた。

と、火事が飛火した。女の悲鳴、子供の泣声、避難する人々の喚わめき声が、山に湖面に反響した。

この時一人の若者が、逃げ惑う人々を押し退けて、小屋の方へ走つて行つた。

他でもない伊太郎で、恋人の安否を気遣つて、家を抜け出して来たのであつた。

小屋は大半焼け落ちていて、焰の柱、煙の渦巻……その中で戦

いが行なわれていた。

役人の一人を殺し、血だらけの竹槍を振りかざしながら、荒れ廻っていた小屋掛があつたが、伊太郎の姿に眼を付けると、

「野郎！」

と叫んで飛び掛かつて行つた。余人ならぬ源太夫であつた。

「紫錦さんは!! 紫錦さんは!!」

「何を吠く!^{ほぎ} 死つてしまえ!^{くたば}」

源太夫は伊太郎の襟上を掴むと、ズルズルと火の中へ引き込もうとした。

と、焰に狂気しながら、馬が一頭走り出して来た。

「鬮殺しだ! 思い知れ!」

伊太郎は馬の背へ括り付けられた。

「ヤツ」と叫ぶと源太夫は竹槍で馬の尻を突いた。

馬はまっしぐら驀地に狂奔し、湖水の中へ飛び込んだ。

ワツワツと云うときのことえ鬨声。火事は四方へ飛火した。

5

湖水は猛烈に荒れていた。火事は益々燃え拡がった。物凄くもあれば美しくもあつた。

紫錦は小舟に取り付いたまま浪の荒れるに委せていた。火事の光が水に映り四辺あたりが茫ぼっと明るかつた。

その時何物か浪を分けて彼女の方へ来るものがあつた。

「おや、馬だよ。馬が泳いで来る」

いかにもそれは馬であつた。

「おや。あお黒だよ、黒来い来い！」

しぎん紫錦は喜んで声を上げた。

馬は馴染の黒であつた。つまり彼女が芸当をする時、時々乗つた馬であつた。近付くままによく見ると誰やら馬の背にくくり付けられていた。それが恋人の伊太郎であると火事の光りで見取つた時の彼女の驚きと云うものはちよつと形容に苦しむ程であつた。その伊太郎は氣絶していた。そうして手足から血を流していた。

彼女は軽業の太夫たゆうであつて馬扱いには慣れていた。で小舟を乗り捨てて馬と一緒に泳ぐことにした。荒れ狂う浪を掻き分け掻き分け馬と人とは泳ぎに泳いだ。精も根も尽き果て、もう溺れるより仕方がないと、こう彼女が思った時、眼前に石垣が現われた。伊太郎の家の石垣であつた。

伊太郎の家ではもう先刻さつきから、伊太郎の姿が見えないと云うので、母をはじめ家内の者は狂人のようになっていた。とそこへ現われたのが伊太郎を抱き抱えた紫錦の姿であつた。

「伊太郎さんが！」

「若旦那が！」

と、にわかになんかは活気付いた。張り詰めていた精神がこの時

一時に弛んだと見えて、紫錦は氣絶してグダグダと倒れた。それと云うので人々は二人を家の中へ昇ぎ入れた。間もなく医者が駆け付けて来て応急手当を施した。

この頃町では火事と戦いとがなお烈しく行なわれていた。それが全すつかり然静まったのは夜も明け方に近い頃で、その結果はどうかと云うに、むしろ諏訪藩の負けであった。小屋者にも浪士達にも、大半逃げられてしまったのであった。

伊太郎と紫錦が蘇生したのはそれから間もなくのことであった。二人は顔を見合わせてかつ驚きかつ喜んだ。紫錦は伊太郎の命の親であった。伊丹屋としても粗末ゆくえに出来ない。それに彼女が属していた例の軽業の一行は、今は行衛ゆくえ不明であった。いわば彼女は

宿なしであつた。で伊丹屋では娘分として彼女を養うことにした。信濃の春は遅かつたが秋の立つのは早かつた。湖水の水が澄みかえり八ヶ嶽の裾野に女郎花おみなえしが咲いた。虫の鳴音が降るようになつた。この頃伊丹屋では諏訪を引き上げ江戸の本宅へ帰るこゝとなつた。

さて、ところで、紫錦にとっては、江戸の本宅の生活は、かなり窮屈なものであつた。ジプシイ型の彼女から見れば、まるで不自由そのものであつた。ちよつと外出でるにも女中が付き、箸の上げ下げにも作法があつた。

「簡単」ということが卑生まれ「面倒臭い」ということが尊ばれた。膝を崩すことも出来なければ寝そべることも出来なかつた。

あらゆるものに敬語を付け、呼び捨てにするのを失礼とした。

「お箸^{はし}」「お香の物」「お櫛^{ぐし}」「お召物」――

彼女は繁雑に耐えられなくなつた。

それに一緒に住んで見れば、柔弱の伊太郎も鼻に付いた。

「万事万端^{こしら}拵え物のようで、活気というものがありやアしない」

彼女はこんなように思うのであつた。

「お金持とか上流とか、そういつた人達の生活^{くらし}方が、みんながみ

んなこうだとすれば、ちつともうらやましいものではない」

とはいえ以前の生活へ帰って行きたいとは思わなかつた。それ

は「泥棒の生活」であり又「動物の生活」だからであつた。

「何か妾にぴつたりと合つた有意味の暮らし方はないものかしら」

彼女はそれを目付けるようになった。

伊丹屋の主人伊右衛門が或日女房にこう云つた「お錦きん、近ちか来ころ

変わつてきたね。なんだかおちつかなくなつたじゃないか」

「そう云えば本当にそうですね」女房のお琴も眉ことを顰しかめ「いった
いどうしたつて云うんでしょう」

「それにお錦は左の腕を、いつも繃帯しているが、どうも私は気
になつてならない」

「ほんとにあれは変ですね」

「お前からそれとなく訊いて見るがいい」

——それで、或日それとなくお琴はお錦へたず訊ねて見た。

「お前傷でもしたんじゃないの？」

「いいえ、そうじゃございません」お錦はそつと着物の上から左の二の腕を抑えたが、

「痣があるのでございますの」

「まあ、そうかえ、痣がねえ」

お琴は意外な顔をした。

6

紫錦しきんは伊丹屋へ来て以来、その名をお錦きんと呼び変えられていた。

そのお錦の最近の希望のぞみは、女中も連れず、ただ一人で浅草辺りを歩いて見たいことで、もしそれが旨く行こうものならどんなにの

うのうするだろう——こう彼女は思うのであった。

で或日外出した時、うまうま途中で女中をまいた。喜んだお錦はその足で浅草の方へ歩いて行つた。浅草奥山の賑にぎわいは今も昔も變りがなく、見世物小屋からは景氣のよい囃子の音が聞こえてきた。恐ろしいような人出であつた。

観音様へお賽錢を上げ、それからお堂の裏手の方へ宛もなく彼女は歩いて行つた。

「オイ紫錦しきんさん、紫錦さんじゃないか！」

誰うしろやら背後から呼ぶ者があるので彼女は驚いて振り返つた。

「おや、お前、トン公こうじゃないか？」

「ナーンだ、やっぱり紫錦さんか」

昔のお仲間、道化のトン公、三尺足らずの福助頭——それが笑いながら立っていた。

「たしかにそうだとは思ったが、何しろ様子が変わっているだろう。おとな
穩し作りのお嬢さん、迂闊うっかり呼び掛けて人異ちがいだったら、こいつ
面目めんぼくがねえからな。それでここまでつけて来たのさ」

「まあそうかえ、どこで目付けたの？」

「うん、玉乗の樂屋でね。俺おいらあそこに傭やとわれているんだ」

二人は歩きながら話すことにした。

「……で、そういった塩梅あんばいでね、諏訪以来一座は解散さ。チリチリバラバラになったのさ。……随分お前を探したよ。親方にとつては金箱だし源公げんこうから見れば恋女だ。そのお前がどこへ行っ

たものか、かいくれ行衛ゆくえが知れねえんだからな。そりやア随分探したもののさ。ああ今だつて探しているよ。執念深い奴らだからな」

「そりやあもう探すのが当然さ」

お錦は何となく憂鬱ゆううつに云つた。「それで、随分怒っているだろうね」

「ああ随分怒っているよ。恩知らずの不幸者だつてね。……そう親方が云うんだよ」

「実の親でもない癖に」お錦はにわかに反抗的に「不幸者が聞いて呆れるよ」

「そうともそうとも本当にそうだ」トン公はすぐに同情した。

「怨こそあれ恩はねえ道理だ。いずれお前を誘かどわか拐わかしたもののさ」

「そうよ、妾の小さい時にね」

「その上ふんだんに稼がせてよ。あぶく銭を儲けたんだからな」

「恩もなけりや義理もない訳さ」

「ところでどうだな、今の生活くらしは？」

「さあね」とお錦は気がなさそうに「大してうらやましい生活でもないよ」

「そうかなア、不思議だなア」トン公は仔細らしく考え込んで

「でもお前めえ伊丹屋といえは江戸で指折の酒屋じゃねえか。そこの養女ときたひにやア云う目が出るといふものだ」

「そりやあそうだよ。云う目は出るさ。でもね、本当の幸福つてものは、そんなものじゃないと思うよ」

「それにお前めえ伊太郎さんは、お前の好きな人じゃアねえか」

「嫌いではなかったという迄の人さ。それにどうも妾とはね、氣心がピッタリと合わないのだよ」

「ふうん、そうかなア、変なものだなア。……だが、オイ、そりやア我儘つてもんだぜ」

しかしお錦は黙っていた。

「だがマアお前めえと逢うことが出来て、俺おいらほんとに嬉しいよ」やあつてこうトン公が云った。

「お前はそうでもあるめえがな」

「いいえ妾だつて嬉しいよ」本心からお錦は云うのであつた。

「何と云つたつて昔馴染だからね」

「そう云われると嘘にしても俺らは素敵にいい気持だよ」

なるたけ人のいない方へと二人は歩いて行くのであった。

「それじゃお前さんはここ当分玉乗の一座にいるんだね」

「他に行き場もないからな」

「それじゃいつでも逢えるのね」

「だが余り逢わねえがいい、今じや身分が異ちがうんだからな」

「莫迦をお云いな。逢いに行くわよ」

「それに親方も源公もいずれ江戸の地にはいるんだからな、あんまり暢のんき気に出歩いていて目付けられると五月蠅うるさいぜ。何しろ源公ときたひにやア、未だにお前に夢中なんだからな」

「源公なんかにや驚かないよ」お錦はむしろ冷笑した。「それこ

そ一睨みで縮ませて見せるよ」

「そりやあマアそうに異えちげねえが……」

トン公はやはり心配そうであつた。

7

二三日経つた或日のこと、浅草観音の堂の側わきに、目新しい芸人が現われた。莖を敷いたその上で大きな鼬を躍らせるのであつたが、それがいかにも上手なので、参詣の人の注意をひいた。

芸人の年輩は不明であつたが、四十歳から六十歳迄の間で、左の耳の根元の辺りに瘤のあるのが特色であつた、陽にやけた皮膚

筋張った手足、一癖あり気の鋭い眼つき、気味の悪い男であった。

「さあさあ太夫さん踊ったり踊ったり」

手に持っていた竹の鞭で、窃そつと鼈そつに障わりながら、錆のある美音で唄い出した。

甲州出るときア涙が出たが

今じゃ甲州の風も厭

春陽が明々と地を照らしその地上では鳩の群が餌をあさりながら啼いいていた。吉野桜が散ってきた。堂の横手芸人の背後うしろに巨大な公孫樹いちようのきが立っていたが、まだ新芽は出ていなかった。鼈そつの大きさは四尺もあろうか、それが後足で立ち上り、前足をブラブラ宙に泳がせ、その茶色の体の毛を春陽はるひにキラキラ輝かせながら、

唄声に連れて踊る態は、可愛くもあれば物凄くもあつた。

投銭放銭がひとしきり降り、やがて芸当が一段落となつた。その時目立って美しい娘が供の女中を一人連れ仲見世の方からやつて来たが、大道芸人の顔を見るとにわかには足を急がせた。その様子が変だったので、大道芸人は眼をそばめた。

「おや？ 可笑おかしいぞ、彼奴あいつそつくりだぞ？」

こう口の中で呟いたかと思うと、彼の側そばに蹲居しゃがんでいた二十四五の若者へ、顎でしやくつて合図をした。

「オイ源公げんこう、今のを見たか？」

「うん」と云うと若者は、その殺氣立つた燃えるような眼で、人混の中へ消え去ろうとする娘の姿を見送つたが、「異ちげいねえよ、

あの阿魔あまだよ」

「だが様子が変わり過ぎるな」

「ナ―ニ彼奴だ、彼奴に相違ねえ」

「そうさ、俺もそう思う」

「畜生、顔を反けやがった」

「オイ源公、後をつけて見な」

「云うにや及ぶだ。見遁せるものか」

で、源公は人波を分け、娘の後を追って行つた。

「さあさあ太夫たゆうさん一踊り、ご苦労ながら一踊り……

男おとこ達だて

ならこの釜かま無なしの流れ来る水止めて見ろ……ヨイサツサ、ヨイサ

ツサ」

大道芸人が唄い出し、鼈が立つておどりだした。

「おおトン公こうか、よく来てくれた」

「爺とつつあん」は嬉しそうにこう云うと、夜具の襟から顔を出した。

「爺とつつあん」は酷く窶やつれていた。ほとんど死にかかっているのであつた。

ここは金龍山きんりゅうざん瓦町かわらまちの「爺とつつあん」の住居すまいの寢間であつた。

「どうだね「爺とつつあん」？ 少しはいいかね？」

トン公は坐つて覗き込んだ。

「有難よえことには、可よくねえよ——「爺とつつあん」はこんな変なことを云つた。

「おかしいじゃないか、え「爺つあん」？　可くもねえのに有難えなんて？」

すると「爺つあん」は寂しく笑い、

「うんにや、そうでねえ、そうでねえよ。俺らのような悪党が、磔刑にもならず、獄門にもならず、畳の上で死ぬるかと思うと、こんな有難えことはねえ」

「へえ、なるほど、そんなものかねえ」トン公はどうやら感心したらしい。「だがね、「爺つあん」俺らにはね、お前が悪党とは思われないんだよ」

「ナーニ俺は大悪党だよ」

「でも「爺つあん」は貧乏人だと見ると、よく恵んでやるじやな

いか」

「ああ恵むとも、時々はな。つまりナンダ罪ほろぼしのためさ」

「でも一座の連中で、お前のことを悪く云う者は、それこそ一人だつてありやアしねえよ」

「それは俺らが座主だからだろう」

「ああそれもあるけれどね……」

「うっかり俺の悪口でも云つて、そいつを俺に聞かれたが最後、首を切られると思うからさ」

「ああそいつもあるけれどね……」

「それより他に何かあるものか」

「金を貸すからいい親方だと、こうみんな云っているよ」

「アツハハハ、そうだろう。その辺りがオチというものだ。ところでそういう人間のことだ、俺が金を貸さなくなったら、今度は悪口を云うだろうよ」

「ああそりやあ云うだろうよ」トン公は直ぐに妥協した。それが「爺つあん」には可笑しかったか面白そうに笑ったが、

「トン公、お前は正直者だな。だから俺はお前が好きだ」

「ううん、何だか解わかるものか」それでもトン公は嬉しそうに笑った。

「うんにや、俺はお前が好きだ。その剽軽な巾きんちやくあたま着頭あたま、そいつを見てみると好い気持になる」

「何だ俺らを黓あざむるのけえ」トン公は厭な顔をした。

「怒っちゃいけねえいけねえ。本当のことだ、なんの鬨るものか。それはそうと、なあトン公、お前は随分苦労したらしいな」

8

「ああ随分苦労したよ」トン公はちよつと寂しそうにした。

「俺らの一座へ来る前には、お前どこの座めえにいたな？」

「俺ら軽業の一座にいたよ」

「軽業の一座？ ふうん、誰のな？」

「かまなし釜無ぶんの文」の一座にだよ」

これを聞くと「爺つあん」は急にその眼を輝かせたが、すぐ気

が付いてさり気なく、

「ああそうか「釜無の文」か……ところで諏訪ではご難だったそうだな」

「お話にも何にもなりやあしない」

「それはそうと文の一座に綺麗な娘がいたはずだが？」

「幾人もいたよ、綺麗な娘なら」

「それ、文の養女だとか云う？」

「ああそれじゃ紫錦しきんさんだ」

「うん、そうそうその紫錦よ、行衛ゆくえが知れないって云うじゃないか」

するとトン公は得意そうにニヤリとばかり一人笑いをしたが

「ああ行衛が知れないよ。……だが俺らだけは知っている」

「え？」と、「爺つあん」は眼を丸くした。「お前知っているつて？ 紫錦の行衛を？」

こう云う「爺つあん」の声の中には恐ろしい情熱が籠っていた。それがトン公を吃びっくり驚させた。

「おいトン公」と「爺つあん」は、夜具から体を抜け出させたが「ほんとにお前が知っているなら、どうぞ俺に話してくれ。お願いだ、話してくれ。え、紫錦はどこにいるんだ？」

「だが紫錦さんの在所ありかを聞いて「爺つあん」お前はどうする意つもりだな」

「どうしてもいい、教えてくれ！ え、紫錦はどこにいるな？」

「お気の毒だが教えられねえ」にべもなくトン公は突つ刎ねた。

「教えられねえ？ 何故教えられねえ？」

「お前の本心が解わからねえからよ」

「俺の本心だつて？ え、本心だつて？」

「今紫錦さんは幸福なんだよ。ああそうだよ大変にね。もつとも
自分じゃ不幸だなんて我儘なことを云つてるけれど、ナーニやつ
ぱり幸しあわせ福しあわせなのさ。だがね、紫錦さんの幸福はね、どうも酷ひどく破こ
壊われやすいんだよ。で、ちよつとでも邪魔をしたら、直ぐヘナに破
壊われちまうのさ。ところでどうも運の悪いことには、その紫錦さ
んの幸福をぶち破壊そうと掛かっている、良くねえ奴がいるのだ
よ。だがここに幸しあわせのことには、まだそいつらは紫錦さんの居場所

を、ちよつと知っていねえのさ。……ね、これで解つたらう、俺らがどうして紫錦さんの居場所を、お前に明かさねえのかつて云うことがな」

「だが」と「爺つあん」は遮つた。「だが俺はお前の云う、よくねえ奴じゃねえんだからな。だから明かしたつていいじゃねえか」
「どうしてそれが解るものか」

「じやお前はこの俺を悪党だと思つているのだな？」

「俺らはそうは思わねえけれど、お前が自分で云つたじゃねえか」
「だが、そいつは昔のことだ」

「ああそうか、昔のことか」

「今では俺はいい人間だ。いつも俺は懺悔しているのだ」

「そうだと思った。そうなくちやならねえ。だが「爺つあん」それにしてもだ、紫錦さんの居場所を俺らから聞いて一体どうするつもりだな？」

すると「爺つあん」は声を窃め、ひそ四辺をしばらく見廻してから「人に云つちやいけねえぜ。え、トン公承知だろうな。……実は俺はその紫錦に大事な物を譲りてえのだ」

「だがお前と紫錦さんとはどんな関係があるんだろう？」

「それは云えねえ。云う必要もねえ」いくらか「爺つあん」はムツとしたらしい。

「とにかく」と「爺つあん」は云いつづけた。「それを譲られると譲られた時から、紫錦は幸福になれるんだよ」

「……」トン公は黙って考え込んだ。どうやら疑っているらしい。しかしとうとうこう云った。

「俺ら、お前を信じることにしよう。紫錦さんの居場所を明かすことにしよう」

「おおそれでは明かしてくれるか。有難え有難えお礼を云う。で、紫錦はどこにいるな？」

「江戸にいるよ。この江戸にな」

「江戸はどこだ？ え、江戸は？」

「日本橋だよ。酒屋にいるんだ」

「日本橋の酒屋だつて？」

「伊丹屋という大金持の養女になっているんだよ」

「ふうん、伊丹屋の？　ふうん、伊丹屋のな？……ああ、夢にも知らなかつた」

葉村^{はむら}一座と呼ばれる所の浅草奥山の玉乗の元締、それをしてい
る「爺つあん」は、どうしたものかこう云うと涙をポロポロ零し
たが、そのまま夜具へ顔を埋めた。

驚いたのはトン公であつた。ポカんと「爺つあん」を眺めやつ
た。

9

チヨンチヨンチヨンと拍子木の音がどこからともなく聞こえて

きた。

「おや、どうしたんだらう？　あの拍子木の音は？」

お錦は呟いて耳を澄ました。

「トン公の拍子木に相違ないよ」

そこで彼女は部屋を抜け出し裏庭の方へ行つて見た。木戸の向うに人影が見えた。下駄を突っかけると飛石伝いに窺そっと其方そっちへ小走つて行つた。燈とも火しびの射さない暗い露路に小供が一人立っていたが、しかしそれは小供ではなく思った通りトン公であった。

「トン公じゃないか、どうしたのさ？」

するとトン公は近寄つて来、

「よく拍子木が解わかつたな」

「お前の打手を忘れるものかよ」

「実は急に逢いたくつてな、それで呼び出しをしたやつさ」

「用でもあるの？ お話しおしよ」

「ねえ紫錦しきんさん、俺らと一緒に、ちよつとそこ迄行つてくれない

か」あたり四辺を憚つてトン公は云つた。

「行つてもいいがね、どこへ行くの？」

「金龍山きんりゅうざん瓦町かわらまちへよ」

「浅草じゃないか、随分遠いね、それにこんなに晩になって」お錦は怪訝そうに云うのであつた。

「それがね、至急を要するんだ」

「へえ不思議だね、何の用さ」

「逢いてえって人があるんだよ。是非お前めえに逢い度えって人がな。それが気の毒な病人なんだ」

「誰だろう？ 知ってる人？」

「お前の方じゃ知らねえだろうよ。だが確かな人間だ。実は俺らの親方なのさ」

「お前の親方？ 玉乗りのかい？」

「ああそうだよ。葉村はむら一座のな。俺らその人に頼まれて、お前を迎いに来たってやつよ」

トン公はそこで気が付いたように、

「だがお前は出られめえな、なにせ大家のお嬢さんだし、もう夜も遅いんだからな」

「行くならこのまま行つちまうのさ」

「だが後でやかましいだろう？」

「そりやあ何か云われるだろうさ」

「困つたな、では止めるか。止めにした方がよさそうだな」

「くずくず云つたら飛び出してやるから、そつちの方は平気だよ。

それより妾わたしにやその人の方が気味悪く思われるがね」

「うん、こつちは大丈夫だ。俺らが付いているんだからな」

「では行こうよ。思い切つて行こう」

そこで二人は露地を出て、浅草の方へ足を運んだ。

「トン公」とお錦は不意に云つた。「今日彼奴あいつらと邂逅であつしたよ。

源公げんこうの奴と親方にね」

「え！」とトン公は怯えたように声を上げたが「ふうんそいつあ悪かったなあ。一体どこで邂逅したんだい？」

「観音様の横手でね」

「それじゃ今日の帰路かえりにだな」

「お前と別れてブラブラ来るとね、むしろ蕨の上で親方がさ、えて物を踊らせていたじゃないか」

「ふうんそいつアしまったなあ」

「早速源公が後をつけて来たよ」

「え、そいつアなおいけねえや」

「ナーニ途中で巻いっちゃったよ」

「そいつアよかった。大出来だった」

話しながら歩いて行つた。

こうして上野の山下へ来た。と五六人の人影が家の陰から現われ出た。

「おや」とトン公が云つた時、堅い棒で脳天の辺りを厭という程ブン撲られた。「あつ、遣られた、こん畜生め！」こう叫んだがその声は咽喉から外へ出なかつた。たちまちにグラグラと眼が廻り、何も彼も意識の外へ逃げた。

お錦は人影に取り巻かれた。

「何をするんだよお前達は！」

気丈な彼女は怒鳴り付けたが、何の役にも立たなかつた。彼女は直ぐに捉えられた。

「構う事アねえ、担いで行け！」

彼等の一人がこう云った。彼女にはその声に聞き覚えがあつた。

「あ、畜生、源公だな！」

「やい、紫錦、態さまあ見ろ！　よくも仲間を裏切つたな、料りょうつてやるから観念しろ！」

源太夫は嘲笑つた。

「さあ遣つてくれ、邪魔のねえうちに」

しかし少々遅かつた。邪魔が早くも入つたのである。

「これ、待て待て、悪い奴等やつらだ！」

こう云つて走つて来る人影があつた。

「あつ、いけねえ、侍だ」

「またにしろ！ 逃げたり逃げたり！」

——源太夫の群はお錦を投げ出しどころも知れず逃げてしまつた。

10

「娘御、お怪我はなかつたかな」

「あぶないところをお助け下され、まことに有難う存じます。ハイ幸い、どこも怪我は……」

「おおさようか、それはよかつた。……や、ここにたお休れているのは？」

こう云いながら若侍はトン公の方へ寄つて行つた。

「わたししりあい妾の知己しりあいでございます。もしや死んだのではございますまいか？」

お錦は不安に耐えないように、トン公の上へ身をかがめた。

若侍は脈を見たが、「大丈夫でござる。生きております。どうやら気絶をしたらしい」

間もなくトン公は正気になった。

「済まねえ済まねえ、眠つちやつた。ナーニもう大丈夫だ。だが畜生頭が痛え」

負け惜しみの強いトン公は、気絶したとは云わなかつた。

二人を救つた若侍はこぼりよしや小堀義哉というもので、五百石の旗本の次

男、小さい時から芸事が好き、それで延えんじゆ寿の門に入り、五年経たぬ間に名取となり、今では立派な師匠株、従つて父親とはソリが合わず、最近家を出て一家を構え、遊芸三昧に日を暮らしている結構な身分の者であつたが今日も清元のおさらいに行き、遅くなつての帰路であつた。

「またさっきの悪者どもが盛り返して来ないものでもない、かわら瓦町まちまで送りましょう」

義哉は親切にこう云つた。

で三人は歩くことにした。

「爺つあん」の住居へ着いたのはそれから間もなくのことであつたが、別れようとする若侍をお願いしてお錦は引き止めて置いて、

家の内へ入って行った。

ガランとした古びた家であった。

そうして「爺つあん」の寝ている部屋は、その家の一番奥にあった。

「「爺つあん」、紫錦しきんさんを連れて来たよ」

トン公はこう云って入って行った。

「トン公、どうも有難う」

こう云いながら「爺つあん」は布団の上へ起き上った。そうしてつつましく膝をついたお錦の顔をじつと見た。

と、みるみる「爺つあん」の眼から大粒の涙が零れ出た。非常に感動したらしい。

「おかしな爺さんだよ、どうしたんだらう？」

お錦はひどく吃驚びっくりした。

勿論彼女には見覚えはない。初めて会った老人である。

「どうして涙なんか零すんだらう？ 妾わたしをどう思っているのだら

う？ 気味の悪い爺さんだよ」

こう思わざるを得なかった。

「トン公」やがて「爺つあん」は云つて「ちよつとこの場を外してくれ。ナーニ大丈夫だ、心配しなくてもいい。ただちよつと話すだけだ」

「「爺つあん」のことだ、ああいいとも」

トン公は云いすてて出て行った。

後を見送った「爺つあん」は、その眼を返すとお錦の顔を、またもじつと見守ったが、

「おお紫錦、大きくなつたなあ」

不意に優しくこう云つた。いかにも親し気な調子であり、慈愛に充ちた調子であつた。

お錦にとつては意外であつた。何の理由で、何の権利で、紫錦などと呼び捨てにするのだろうか？ で彼女は不快そうに顔をそむけて黙っていた。

「それに、ほんとに、立派になつたなあ」

また「爺つあん」はこう云つた。感情に充ちた声である。

「いらざるお世話で、莫迦にしているよ」いよいよ慣れ慣れしい

相手の様子に、彼女は一層腹を立て、心の中でこう怒鳴どなったが、でもやつぱり黙っていた。

しかし「爺つあん」は態度を変えず、同じ調子で云いつづけた。「聞けばお前は日本橋の伊丹屋さんにいるそうだが、この上もない結構なことだ。辛抱して可愛がられ、嫁になるように心掛ければならねえ」ここでちよつと言葉を切ったが、「ところで前は二の腕に、大きな痣があるだろうな？」

「ええ」と初めてお錦は云った。「大きな痣がありますわ。どうしてそんなこと知っているんでしょう？」

「私はな」と「爺つあん」は微笑しながら「そうだ、私はな、お前のことなら、どんなことでも知ってるよ」

確信のあるらしい調子であった。

で、お錦は怪しみながらも改めてつくづく「爺つあん」を見た。しかしやはりその老人は、彼女にとっては見覚えがなかった。

二

「紫錦しきん」と「爺とつつあん」は云いつづけた。「俺の命は永かあねえ、胃の腑できものに腫物できものが出来たんだからな。で俺はじきに死ぬ。また死んでも惜しかあねえ。俺のような悪党は、なるだけ早く死んだ方が、かえって人助けというものだ。それで死ぬのは惜しかあねえが、ここに一つ惜しいものがある。他でもねえこの箱だ」

布団の下から取り出したのは、じんたいすぎ神代杉の手箱であつた。

「これをお前に遣ることにする。大事にしまつておくがいい。そうして俺が死んだ後で、こっそ窃りひらいて見るがいい。お前をしあわせ幸福にしようからな」

ここでちよつと憂鬱になつたが、

「そうだ、そうしてこの箱をひらくと、お前の本当の素性もわかる。もつともそいつはかえつてお前をふしあわせ不幸にするかもしれねえがな。……だがそれも仕方がねえ」

「爺つあん」はしばらく黙り込んだ。

それからソロソロと手を延ばすと、指先を畳目へ差し込んだ。

それからじつと聞き耳を澄ましあたり四辺の様子をうかがつてから、ヒ

ヨイと畳目から指を抜いた。

「これを」と「爺つあん」は囁くように云った。「早くお取りこの鍵を！」

見ると「爺つあん」は指先に小さい鍵を摘まんでいた。

「箱も大事だが鍵も大事だ。鍵の方がいつそ大事だ。だから別々にしまつて置くがいい。この鍵でなければこの箱は、どんなことをしても開かないんだからな、……とところで紫錦よ気をおつけ。敵があるからな、敵があるからな。……で、もうこれで用はおえた。気をつけてお帰り、気を付けてな」

そこでお錦は二品を貰い、急いで部屋を抜け出した。

送るといふのをことわつて、義哉よしやと一緒に帰ることにした。

森然とふけた夜の町を、二人は並んで歩いて行つた。

義哉から見たお錦という女は、どうにも不思議な女であつた。

華美な身装、濃艶な縹緖、それから推すと良家の娘で、令嬢と云つてもよい程であつたが、その大胆な行動や、物に臆じない振舞から見れば素人娘とは受け取れない。

「不思議だな、見当がつかない。……だが実に美しいものだ。しかしこの美には毒がある。触れた男を傷つける美だ」

肩をならべて歩きながらも、警戒せざるを得なかつた。

「ところで住居はどの辺りかな？」

こらえられずに訊いてみた。

「ハイ、日本橋でございます」

「日本橋はどの辺りかな？」

「あの伊丹屋という酒問屋で」

「はあ、伊丹屋、さようでござるか」

義哉はちよつとびつくりした。伊丹屋といえは大家である。その名は彼にも聞えていた。

「失礼ながら、ご令嬢かな？」

「ハイ、娘でございます」

「さようでござるか、それはそれは」

こうは云つたが愈々 いよいよますます 益々、疑わざるを得なかつた。

「それほどの大家の令嬢が、こんな深夜に江戸の町を、あんな片輪者を一人だけ連れて、浅草あたりのあんな家を、どうして訪ね

たものだろう？ いやいやこれは食わせ物だ。色を売る女である
うもしれぬ」

しかし間もなくその疑いが杞憂であったことが証拠立てられた。
「あの、ここが妾わたくしの家で」

こう云いながら指差した家が、紛れもなく伊丹屋であったから
である。

「あの……」とお錦は云い難そうにしばらくもじもじしていたが
「いずれ明日改めて、お礼にお伺い致しますがどうぞその時まで
この手箱をお預かり下さることになりますまいか」

こう云いながら差し出したのは「爺つあん」から貰った手箱で
あった。

「ははあ」と義哉は胸の中で云った。「さては恋文でも入れてあるのだな。あの浅草の古びた家は媾あいびき曳きの宿であつたのかもしれない。大胆な娘の様子から云つても、これは確かにありそうなことだ。とんだ所へ飛び込んだものだ」

苦笑せざるを得なかつた。

彼は身分は武士ではあつたがその心持は芸人であつた。でこう
いう頼み事を、断るような野暮はしない。

「よろしゅうござる、承知しました」

こう云つて手箱を受け取つた。

「拙者の姓名は小堀義哉、住居は芝の三田でござる。いつでも受け取りにおいでなさるよう」

こう云い捨てて歩き出し、少し行つて振り返つて見ると、伊丹屋の表の潜戸くぐりどがあき、そこから内へ入つて行く美しいお錦の姿が見えた。

12

「爺つあん」はすっかり疲労つかれてしまった。

ひどく感動をした後の、何とも云われない疲労であつた。

で、布団を胸へかけ、静かに睡ねむりへ入ろうとした。すると襖がひつそりとあいて、雇やとい婆ばあさんが顔を出した。

「もし、親方、お客様ですよ」

「誰だか知らねえが断っておくれ」

「どうしても逢いたいって仰おっしゃ有るので」

「ところが俺は逢いたくねえのだ」

「困りましたね、どうしましょう」

婆さんはいかにも困ったらしかった。

「どんな人だね、逢いたいって人は？」

それでもいくらか気になるか、こう「爺つあん」は訊いて見た。
と婆さんが返事をしないうちに、

「「爺つあん」俺だよ」という声がした。

開けられた襖のむこう側に、一人の男が立っていた。耳の付け
根に瘤があった。

「おつ、お前は文じゃねえか！」

「爺つあん」は仰天してこう叫んだ。

「うん、そうだよ、「釜無かまなしの文ぶん」だよ」こう云いながらその男は、ヌツと部屋の中へ入って来たが「婆さん」と、ひどく威嚇的に「お前あつちへ行つていな、俺おいら「爺つあん」に用があるんだからな」

雇婆さんが行ってしまった後、二人はしばらく黙っていた。

「オイ」と文はやがて云った。「久しぶりだな、え「爺つあん」……いや全く久しぶりだ」

「うん」と「爺つあん」は物憂そうに「久しぶりだよ、全くな」

「おいら夢にも知らなかった。まさかお前が江戸も江戸、浅草奥

山でも人気のある、葉村はむら一座の仕打しうちとして、こんな所にいようとはな。……なるほど、世間はむずかしい、これじゃ探しても目付からなかった訳だ」

「目付けてくれずともよかったに」

「お前の方はそうだろうが、俺の方はそうはいかねえ」

「ところで、どうして目付けたな？」

「うん、それが、偶然からさ。今日お前のやっている葉村の玉乗を見に入つたものさ。俺だって生きている人間だ、たまには楽しみだつて必要つてもものさ。ところでそこでトン公を目付けた」

「ああ成程、トン公をな」

「彼奴きやつは元々俺の座で、道化役をしていた人間だ」

「そういうことだな、トン公から聞いた」

「ところが今じやお前の座にいる」

「ははあ、それじゃ、それについて、文句をつけに来たんだな」

「うんにや、違う、そうじゃねえ。……俺おいら信州の高島で、とん

でもねえブマを打ちちやつてな、一座チリチリバラバラよ。だからトン公がどこにしようど、苦情を云つてく筋はねえ。だからそれと手繰つて行つて、お前という者を探りあてたのよ」

「で、お前の本心はえ？」こう「爺つあん」は切り出した。

「よく訊いた、さて本心だが、どうだい「爺つあん」かえっこ交換しよ
うじゃねえか」釜無しの文はツツケリと云つた。

「交換だって？ え、何の？」

「永年お前が欲しがっていた、あの紫錦を返してやろう。その代り一件の手箱をくんな」

「成程」と云ったが、「爺つあん」は、変に皮肉に微笑した。

「その交換なら止めようよ」

「え、厭だって？ どうしてだい？」文は明かにびっくりした。

「もうあの娘には用がねえからさ」

「おかしいな、どうしてだい？」

「俺の心が変ったからさ」

「だって、お前の子じやあねえか」

「それに」と「爺つあん」は嘲笑うように「噂によるとあの紫錦

は、高島以来お前の所から、行衛ゆくえを眩ましたって云うじゃねえか」

「え？」と云ったが釜無しの文は、顔に狼狽を現わした。しかしすぐに声高く笑い「トン公の野郎め、喋舌喋ったな！」

「手許にもいねえその紫錦を、どうして俺らへ返してくれるな？」
「うん」と云ったが、行き詰ってしまった。

「だがな」と文は盛り返し「いかにも紫錦は手許にはいねえ。だが居場所は解っている。源公が後をつけて行ったはずだ」

「ふうむ」

と今度は「爺つあん」の方が、苦悶の色を現わした。

「だから紫錦は俺達のものさ」

「ほんとに居場所を知っているのか？」

「知っていなくてさ。大知りだ」

「どこに居るな？ 云ってみるがいい」

「じゃ、よこせ、杉の手箱を！」

隙さず文は手を出した。

13

「その手箱なら手許にないよ」素気なく「爺つあん」は云い放った。

「嘘を云いねえ、ほんとにするものか」文は憎さげに笑ったが、「ではどうでも厭なのだな。ふん、厭なら止すがいい。その代り

紫錦を連れて来て、もう今度は遠慮はいらねえ、何も彼もモミク
チヤにしてやるから」

これを聞くと「爺つあん」の顔は、不安のために歪んだが、

「文！ 紫錦にや罪はねえ！ そんな事はよしてくれ！」

「じゃ、手箱を渡すがいい」

「ないのだないのだ！ 手許には！」

「じゃ一体どこにあるのだ？」

「そいつあ云えねえ。勘弁してくれ」

「云えなけりやそれまでよ。……そろそろ料理に取りかかるかな」
文は部屋から出ようとした。

「オイ待ってくれ、釜無しの！」と「爺つあん」は周章あわてて呼び

とめた。

「何か用かな？ え、「爺つあん」？」相手の苦痛を味わうかの
ように文はゆつくりとこう云った。

「ほんとに紫錦をいじめる気か？」

「二枚の舌は使わねえよ」

「ほんとに居場所を知ってるのか？ え、紫錦の居り場所を？」

「二枚の舌は使わねえよ」

「それじゃどうも仕方がねえ」じつと「爺つあん」は考え込んだ
が、

「云うとしよう、在り場所をな」

「おお云うか、それはそれは」文はニタリと北叟ほくそえ笑みをしたが、

「どこにあるんだ、え、手箱は」

「その代り手箱を手に入れたら、きつと紫錦からは手を引くだろうな」

「云うにや及ぶだ、手を引くとも。元々あの娘を抑えたのは、その手箱が欲しかったからさ。いわば人質に取つたんだからな。……で、手箱はどこにあるな？」

「よく聞きねえよ、その手箱はな……」

「おっと、云つちやいけねえ！」突然こう云う声が出た。

驚く二人の眼の前へ、襖をあけて現われたのは、他でもないトシ公であったが、頭を白布で巻いているのは、傷を結いわえたからであらう。

「おお親方、久し振りだね」まず文へ挨拶をした。

「や、手前、トン公じゃねえか！」文は憎さげに怒鳴りどな声をあげ

「福助の出る幕じゃあねえ、引っ込んでろ！」

「そいつはいけねえ、いけねえとも、お生憎さまだが引っ込めねえ」負けずにトン公はやり返した。

「と云うなあお前さんが、あんまり嘘を云うからさ」

「ナニ嘘を云う？　嘘とはなんだ！」

「嘘じゃねえかよ、ねえ親方、なんのお前さんや源公が、紫錦さんの居場所を知ってるものか。大嘘吐きのコンコンチキさね。こつちはちやあんと見透しだあ」トン公は小気味よく喝破してから、
「ねえ親方、嘘だと思ふなら、荒筋を摘まんで話してもいい。聞

きなさるか、え、親方おやかた？」

文は返辞をしなかった。

「まずこうだ、しかも今日、お前さんとそうして源公とが、観音堂の横つちよで、エテ物を踊らせていたつてものだ。するとそこへ遣つて来たのが、令嬢姿の紫錦さんよ。で、早速源公が後をつけたというものだ。そうさ、ここまでは成功だ。だが、後が面白くねえ、そうさ、途中でまかれたんだからな。アツハハハ、いい面の皮さ。……だから親方にしろ源公にしろ、紫錦さんの居り場所なんか、知ってるはずはねえじゃあねえか。へん、この通り、見透しだあね」

文は返辞をしなかった。事實は返辞が出来なかった。それとい

うのもトン公の言葉が一々胸にあたるからであつた。

「トン公！」ととうとう喚くように云つた。「昔の親方の恩を忘れ、襟元へ付こうつて云うんだな。覚えていろよ、いい事アねえぞ」

「覚えているとも」とトン公は笑い、「悪いことは云わねえ帰つた方がいい。そうだ足下の明るいうちにね」

云い捲くられた釜無しの文は、きりよう縹緞を下げたて帰ることになつた。

足音が門口から消えた時、「爺つあん」は深い溜息をした。

「……すんでに瞞される所だつた。トン公、ほんとに有難うよ」

「ナーニ」と云つたがトン公は、頭の繻帯を手でさぐり、「どう

もいけねえ、まだ痛えや。……だがね「爺つあん」実の所はね、紫錦さんは浮雲あふねえんだよ」

「え、どうしてだい？ どうして浮雲えな？」

「源公の野郎ヤケになって、江戸中探しているらしいんだ。それで今夜もぶつかつたつて訳さ。この頭の傷だつて、つまり何だ、その時の土産みやげさ。……あれいけねえ、まだ痛えや！」怨めしそうな顔をした。

14

よし足引の山めぐり、四季のながめも面白や、梅が笑え

ば柳が招く、風のまにまにさわらび早蕨の、手を引きそうてやよい弥生

山……

その翌日の午後であったが、こぼりよしや小堀義哉は裏座敷で、きよもと清元の
『やまうば山姥』をさらっていた。

と、襖がつつましく開いて、小間使いのお花が顔を出した。

「あの、お客様でございます」

「お客様？ どなただな？」

「伊丹屋いたみやの娘だと仰おっしゃ有いまして、眼さめの醒るような美しい方が、

駕籠でお見えでございます」

「ああそうか、通すがよい」

間もなく部屋へ現われたのは、盛装をしたお錦であった。

「お錦殿か、よく見えられたな」義哉は愛想よく声を掛けた。

「昨夜はお助け下されまして、お蔭をもちまして危難を遁がれ、何とお礼を申してよいやら」

お錦は手をつけて辞儀をしたが、「お礼にあがりましてござり
ます」

其処へ小間使いが現われて、頂戴物の披露をした。

「それはそれはご丁寧に。そんな心配には及ばなかったものを」
義哉はかえって気の毒そうにした。

一人は美男の若侍、一人は妖艶な町娘、それに男は武士とは云
つても、清元の名手で寧ろ芸人そうして女は其昔は女軽業の太夫
である。それが春の日の閑静な部屋に、二人だけで向かい合つて

いるのであった。

二人はしばらく黙っていた。蒸されるような沈黙であった。

「おおそうそう、杉の手箱をお預かりしてあつたはず、お持ち帰りになられるかな」やがて義哉はこう云つて、ものしずかに立ち上りかけた。

「ハイ」と云つたが、周章あわてて止め、「ご迷惑でないようでごございましたら、その手箱はもう少々お預かりなされて下さいますよう」

「ははあ左様か、よろしゅうござる」

この手箱がありさえしたら、これから度々この娘が、訪ねて来ないものではない。何と云つても美しい娘で、美人を見るとい

ことは、悪い気持のものではない。……これが義哉の心持だった。それで、承知したのであつた。話の口が切れたので、すぐに義哉は追っかけて訊いた。

「由よしありそうな杉の手箱、何が入れていますかな？」

「さあ何でございましょうか」お錦は一向平気で云つた。「戴いたものでございませうの」

「ほほう左様で、誰人どなたからな？」

「ハイ、見知らぬ老人から」

「見知らぬ老人から？ これは不思議」

「ほんとに不思議でございませう。……昨夜あれから参りました、かわらまち瓦町の古家で、気味の悪い老人から、戴いたものでございま

す」

「ふうむ」と云つたが小堀義哉は、にわかに興味に捉えられた。

で、立ち上つて隣室へ行き、袋戸棚の戸をあけて、杉の手箱を取り出して来た。それから仔細に調べたが、

「この箱は杉ではない」先づこう云つて首を傾げた。

「杉でないおっしやと仰有いますと？」

「杉材としては持ち重りがする。鐵で作つた箱の表皮へ、杉の板を張り付けたもので、しかも日本の細工ではない。支那製か南蛮製だ」

「マアさようでございますか」お錦も興味を感じてきた。

「ひとつ、開けて見ましようかな。おおここに鍵穴がある。さて

鍵だがお持ちかな？」

「ハイ、うちにならございます」

「では明日にでも持って来て、ともかくも開けて見ましようかな」
「そういうことに致しましょう」

ここで話がちよつと切れた。

もう夕暮ゆうやみに近かった。庭の築山では吉野桜が、微風にもつれて散っていた。パチツ、パチツと音のするのは、泉水で鯉が躍ねるのであった。

何気なくお錦は庭を見た。往来と境の黒板塀にかなり大きな節穴があつたが、そこから誰か覗いていると見えてギラギラ光る眼が見えた。

「あれ！」とお錦の叫んだ時には、もうその眼は消えていた。

15

やがて夕暮がやって来た。お暇をしなければならなかった。充分の未練を後へ残し、お錦は駕籠で帰って行った。

「よこしまの美であろうとも、美人はやっぱり好ましいものだ」
義哉よしやはこんなことを想いながら、部屋に残っている脂粉の香に、うっとりときめかした。

思い出して三味線を取り上げると、さっきの続きを弾き出した。

雁たまづさがとどけし玉章は、小萩のたもとかるやかに、へん

じ紫苑しおんも朝顔の、おくれさきなるうらみわび……

ちようどここまで引いて来た時、どうしたものか一の絃が、鈍い音を立ててブツツリと切れた。

「これはおかしい」と云いながら三味線の棹を膝へのせ、義哉は小首をかたむけた。

「一の絃の切れるのは、芽出度いことになっているが、どうもそうとは思われない」彼は何となく不安になった。「変ったことでもなければよいが」

帰って行つたお錦のことが、妙に気になつてならなかつた。で、三味線を搔いて遺ると彼は急いで立ち上つた。

「お花お花」と小間使を呼び「ちよつと私は出てくるからね。こ

の手箱をしまっておくれ」

云いすてとつかわ家を出ると、愛宕下あたごの方へ足を向けた。

暮れそうで暮れない春の日も、愛宕下へ来た頃には、もうすっかり暮れてしまつて、人の顔さえさだかでなかつた。その時こんもりと繁り合つた、林の中から云い争うような男女の声が聞こえてきた。

さてこそ！ というような気持がして、義哉はそつちへ走つて行つた。

そこは林のずっと奥で、丘になろうとする傾斜地であつたが、香具師やし風をした八九人の男が、一人の娘を真中に取り込め、口汚く罵つていた。その娘はお錦であつた。それと見て取つた小堀義

哉は、足音荒く走り寄つたが、

「この破落戸ならずもの！」と一喝した。

しかしこれは悪かった。破落戸のうち四五人の者が、急に彼の方へ向かつて来た。そうして後の四五人は、お錦を宙へ吊るすようにして、一散に丘の方へ走り出した。ならずものなどと声をかけずに、忍び寄つて一刀に、彼らの一人を斬つたなら、彼らは恐れて逃げたかもしれぬ。

義哉へ向かつた破落戸達は、いずれも獲物を持っていた。そうして人数も多かつた。無手であしらうのは困難であつた。そこで義哉も刀を抜いた。

義哉は芸人ではあつたけれど、武術もひととおりは心得ていた。

しかし勿論名人ではなかつた。とはいへ四五人の破落戸ぐらゐに、^ひ退けを取るような未熟者でもなかつた。

しかし彼の心持は、この時ひどく混乱していた。娘を助けなければならぬからであつた。

彼は平和好きの性質からいへば、人を斬るのは厭であり、峯打ちぐらゐで済ましたかつたが、しかしそうはいかなかつた。破落戸どもの抵抗は、思ったよりも強かつた。

「チエツ」と一つ舌うちをすると、真先に進んで来た破落戸の右の手首へ斬り付けた。

侍でない悲しさに、斬り付けられた破落戸は、ワーツと叫ぶと尻もちを突いた。踏み込んで行って斬り付けるのは、容易なこと

ではあつたけれど、義哉はそうはしなかつた。ビューツと刀を振り廻し、

「まだ来る気か！」と威嚇した。

これは非常に有効であつた。ワーツと叫ぶと破落戸どもは、手負いの仲間を捨てたまま、パラパラと四方へ逃げ散つた。

その隙に義哉は走り出した。

朧ろの春の月影に、丘の方を透かして見ると、お錦をかどわかつた一団は、今や丘を上りきり、向う側へ下りようとしていた。

で、血刀をさげたまま彼はその後を追つかけた。しかし頂上まで来た時には、彼等の一団は丘を下り、ともえちよう巴町の方へ走つてた。

そこで彼も丘を下り、彼らの後を追っかけて行つた。

夜の静寂を驚かせ、彼らの走る足音は、家々の戸に反響したが、さてその戸を引き開けて、事件の真相を知ろうというような、冒険好きの者はいなかつた。この頃は幕府も末の末で、有司の威令は行なわれず、將軍の威厳さえほとんど傾き、市中は文字通り無警察で、白昼切取強盜さえあつた。

そこで、市民は日中さえ、店を開こうとはしないほどであつた。その時、破落戸の一団は、にわかには大通りから横へそれた。で、義哉もその後を追ひ、狭い露路を左へ曲がつた。

曲がつて見て彼はアツと云つた。露路は浅い袋路なのに、彼らの姿がどこにも見えない。

彼は棒立ちに突立った。それから仔細に辺りを見た。

16

左と右は板壁で、出入口らしいものは一つもなく。ただ正面に古びた家が、戸口を向けて立っていた。

「ああ、あの家へ入り込んだな」

こう思った彼は走り寄ると、躊躇なく表戸へ手を掛けた。すると意外にもスルリと開いた。内へ入って見廻すと、空家と見えて人影もなく、家具類さえ見あたらない。

裏にも一つの出入口があつて、その戸がなかば開いていた。

「うん、あそこから抜け出したのだな」

で、彼はその口から、急いで外へ出ようとした。すると、その戸がにわかに関じ、かんぬき 門を下す音がした。

「しまった！」と叫ぶと身を翻えし、入って来た口から出ようとした。するとその戸も外から閉ざされ、門のかかる音がした。

もう出ることは出来なかつた。彼は監禁されてしまった。

こんな場合の彼の心に、よくあてはまる形容詞といえば「茫然」という文字だろう。実際彼は茫然として、暗黒の家内に突立っていた。

しかしいつまでも茫然として、突立っていることは出来なかつた。抜け出さなければならなかつたし、追っかけなければならな

かった。いやいやそれよりこうなってみれば、先ず何より自分身の、安全を計らなければならなかった。

「戸を破るより仕方がない」そこで彼は全力を集め、裏戸へ体をぶつつけた。

途端に人声が聞こえてきた。

「こつちでござる。お入りなされ」

ギョツとして四辺^{あたり}を見廻すと、一筋の火光が天井から、斜に足許へ射していた。二階から来た燈火^{あかり}である。ぼんやりと梯子段も見えている。その梯子段の行き詰まりに、がんじょうな戸が立ててあり、それが細目にあけられた隙から火光が幽^{かすか}に洩れていた。

「それでは空家ではなかったのか」こう思うと彼は心強くなった。

それと同時に案内も乞わず、他人の家へ入り込んだことが、申し訳なくも思われた。

「こちらへ」

という声が聞こえた。

そこで彼は階段を上った。

思わず彼はあつと云った。二階の部屋の光景が不思議を極めていたからであつた。そこには十人の男がいた。一人は按摩、一人は瞽女ごぜ、もう一人は琵琶師、もう一人は飴屋、更に、居合拔に扮したもの、更に独楽師こましに扮したもの、又は大工又は屑屋、後の二人は商人風に、縞の衣裳を着ていたが、いずれも鋭い眼光や、刀を左右に引き付けている様子で、武士であることが見て取られた。

そうして彼らの真中に一葉の図面が置かれてあつたが、他ならぬ千代田城の図面であつた。

「これは浪士だ！ 浪士の密会だ！」早くも察した小堀義哉は戦慄せざるを得なかつた。

浪士達の方でも驚いたらしく、互に顔を見合わせたが、

「これは人違いだ。本^{ほんじょう}庄氏ではない」琵琶師に扮した一人が云つた。

「貴殿は一体何者かな？」

「拙者は旗本、小堀と申すもの、人を迫つ駆けて参つたものでござる」義哉は正直に打ち明けた。

「実は空家と存じましてな」

「左様、ここは空家でござる。……幽霊屋敷で通っている。外桜田の毛脛屋敷けずねでござる」

これを聞くと小堀義哉は、「ああそうか」と思わず云った。天井から毛脛が下がって来て悪戯をするという所から、外桜田の毛脛屋敷と呼ばれ、いつまで経っても住手のない家が、一軒あるという噂は、既に以前に聞いていた。「はああそれでは浪士どもが、集会の用に立てようため、そんな気味の悪い噂を立て、人を付近に近寄せないのだな」こう考えて来ていよいよ義哉は身の危険におの戦慄いた。

その時浪士たちは顔を寄せ合い、しばらくヒソヒソ相談したが、「さて小堀義哉氏とやら、我々を何と覚しめすな？」琵琶師風の

一人がやがて云った。

「姿はさまざまにやつ俏しては居れど、浪土方と存ぜられます」

「いかにも左様、浪士でござる。……何の為の会合とおぼしめすな？」

「それはトント存じませんな」

「この図面、ご存知かな？」

琵琶師は図面を指差した。

「千代田の城の図面でござろう」

すると浪士は頷いたが、

「実は我ら千代田城へ、火を掛けようと存じましてな。それで会合をして居るのでござる」

家常茶飯事でも話すように、こう浪士はスラスラと云った。そうしてじつと眼を据えて、義哉の顔を見守った。

一七

主君も主君將軍家の城を、焼打ちにしようというのであるから、これが普通の幕臣なら、カツと逆上のぼせるに違いない。

勿論義哉もカツとなった。しかし義哉は芸人であつて、忍耐性に富んでいた。それで、別に顔色をかえず、冷やかに相手を見返した。

「小堀氏、何と思われるな？」

琵琶師風の浪士は嘲笑うように「さぞ憤慨に堪えられますまいな」

「破壊、放火、殺人というような殺伐なことは大嫌いでござる。こういう意味から云う時は、勿論貴所方きしよの計画を、快く思うことは出来ませんな」義哉は憚らず思う所を云った。

「將軍に対する反逆については？」

「それとてよくはござらぬな。しかし、大勢というものは、多数の意嚮いこうに帰するものでござる。天下は一人の天下ではなく、即ち天下の天下でござる、いや、帝の天下でござる」

「しかし、貴殿は旗本とのこと、すれば將軍は直接の主君、それに反抗するこの我々をさぞ憎く覚し召さりような？」

「さようでござる、普通にはな」義哉は敢て興奮もせず「しかしそれより実の所は、勤王、左幕の衝突の結果、世間がいつ迄もおちつかず、その為芸道の廃れを見るのが、拙者にとっては残念でござるよ」

「ナニ、芸道とな？ 何の芸道？」

「清元、常磐津ときわづ、長唄、新内、その他一般の三味線学でござる。日本古来よりの芸道でござる」

これを聞くと浪士達は、一度にドツと笑い出した。それから口々に罵った。

「アツハハハ、沙汰の限りだ。こういう武士があればこそ、徳川の天下は亡びるのだ」

「兩刀をたばさむ武士たるものが、遊芸音曲に味方するとは、さ
てさて武士道もすたれたものでござるな」

「諸君、そういったものでもない」こう静かに止めたのは、例の
琵琶師風の浪士であつた。どうやら一座の頭目らしい。グイと義
哉の方へ膝を進めたが、

「いや仰せごもつともでござる。武道であれ遊芸であれ、人の世
に必要ながあればこそ、産れもし繁栄も致すので、この世に用のな
いものなら、産れもせねば繁昌もしまい。せつかく栄えた遊芸道
が、衰退に向うということは、それを愛する人々にとり、遺憾で
あるに相違ござらぬ。……がそれはともかくとして、たとえ偶然
であろうとも、我らが集会へ突然参られ、一切の秘密を知つたか

らは、お気の毒ながら安穩に、お歸しすることは出来ませんでな
さも笑止だというように、こう云うとその浪士は微笑した。

どうせ無事ではあるまいと、ひそかに覚悟はしていたものの、
いよいよこのように明かされてみれば、義哉としても恐ろしかつ
た。彼は下俯向き、黙って唇を噛みしめた。

「しかし貴殿はたった一人、それに反して我らは十人、一度にか
かつては後の人に、卑怯の譏りを受けるでござろう。そこで一人
ずつの真劍勝負、最初に拙者がお相手致す、お立合い下さること
なりますまいかな」

言葉は丁寧ではあつたけれど、語韻に云われぬ殺気があつて、
義哉の心をおびやかした。

「その立合いなら無駄でござる」やがて義哉は冷やかに云った。

「ほほう、それは何故でござるな？」

「なぜと申して、立ち合ったが最後、負けるに相違ござらぬからな」

「ふうむ、それで、厭とおっしゃるか」さも案外だと云うように、
「しかし、それでは卑怯でござるぞ」

「負けると知って剣を合わせ、万一の僥倖を期する者こそ、即ち卑怯と申すもの。拙者はそれとは反対でござる」

「なるほど」と浪士はそれを聞くと、どうやら感心したらしかった。「と申してこのままお帰ししては、秘密の洩れるおそれがある。いよいよお立合い下さらぬとあつては、お気の毒ながら一刀

の下に……」

「よろしゅうござる、お斬りなされ」

いよいよ不可いけないと知ってからは、却つて捨身の度胸が定きまり、義哉の心は澄み返つた。そこで、膝へ両手を重ね、頸をグイと前へ延ばした。

それと見てとると例の浪士は、やおら立ち上つて太刀を抜いたが、「神妙のお覚悟感じ入つてござる、何か遺言はござらぬかな」「左様」と云つて首をかしげたが「ちよつと三味線をお貸し下され」

ここに至つて浪士どもは、啞然たらざるを得なかつた。

「何になさるな？」と例の浪士が訊いた。

「途中で弾き止めた清元の『山姥』、今生の思い出に了え
とうござる」

「ははあ」と云うと例の浪士は、仲間の者と眼を見合わせたか、
やがて頤で合図をした。瞽女ごぜに扮した浪士の一人が、そこで三味
線を押しやった。

艶えんに床ゆかしい三味線の音色が、毛脛屋敷から洩れたのは、それか
ら間もなくのことであつた。

18

ちょうど同じ夜のことであつたが、芝三田の義哉よしやの家では、奇

怪な事件が行なわれた。主人義哉が出かけて行った後、小間使のお花は雇女ばあやと一緒に、台所で炊事を手伝っていた。

と、口笛の音がした。

物みな懐かしい春の宵で、後庭では桜が散っていた。

ヒューヒューと鳴る口笛の音も春の夜にはふさわしかった。

しかしその時、居間の方で、変にカキカキいう音がした。

「おや」とお花は聞耳を立てたが、手に葱ねぶかを持ったまま、急いでそつちへ行つてみた。

一匹の奇形な動物が、背を蜷うねらして走り廻っていた。犬のように大きな鼬であったが、口に手箱を銜くはえていた。

「あつ」とお花は悲鳴をあげ、無宙で葱を投げつけた。

鼬の何よりも嫌いなのは、刺戟性の葱の匂であつた。それで、鼬は一跳ね跳ねると、食わえていた手箱を振り落とし、庭の茂へ走り込んだ。

「ああ恐かつた」と溜息をしながら、お花はしばらく立ち縮んだものの、気が付いて手箱を取り上げた。

彼女は利口な女であつた。鼬が手箱を狙つたのは偶然ではあるまいと推量した。そこで、手箱を持ったまま女中部屋の方へ入つて行つた。ふたたび彼女が現われた時には、風呂敷に包んだ小さな箱を、大事そうに両手で捧げていた。そうして主人の居間へ行くと、袋戸棚をそつと開け大切そうに藏しまい込んだ。

お花の聡明な心遣いが、無駄でなかつたといふことは、その夜

が更けてから証明された。

庭の茂が幽かすかに揺れると、香具師風やしの若者が手拭でスツポリ顔を隠し、刻み足をして現われたが、ぴったりと雨戸へ身を寄せた。

こういうことには慣れてしていると見え、二三度小手を動かしたかと思うと音もなく雨戸がスルスルとあき、横縁が眼前に現われた。その向こうに障子が見え、それを開けると義哉の居間で、主人がいないにも拘らず燈火あかりがポツと射していた。

香具師風の若者は、膝で歩いて障子へ寄り、内の様子をうかがったが、誰もいないと確かめると躊躇せず障子を引きあげた。それからスツクリ立ち上ると袋戸棚の前へ行き、手早く箱を取り出した。

その時人の氣勢けはいがした。

あわてた彼は盗んだ箱を手早く懐中へ捻じ込んだが、もう足音を忍ぼうともせず、縁から庭へ飛び下りた。

ざわざわと茂みの揺れる音、つづいて口笛の音がしたが、後は寂然としずかになった。引き違いに居間へ現われたのは、例の小間使いのお花であつて、先ず静かに雨戸をとじ、それからしとやかに障子をしめた。

見れば手箱を持っている。

乙女に有り勝ちの好奇心が、彼女の心に湧いたのであろう、燈ともしび火の前へ坐りこむと、先ず髪から簪を抜き、その足を鍵穴へ差し込んだ。しかし錠前は外れなかつた。

で、手箱を膝の上へのせ、しばらくじつと考え込んだ。

見る見る彼女の眼の中へ燃えるような光が射して来た。

彼女は突然叫び出した。「泥棒どろぼうでございます泥棒でございませす！」

そうして手早く杉の手箱を自分のふところへ捻じ込んだ。

けたたましい声に仰天して、家の人達が集まって来たのは、その次の瞬間のことであつたが、いかさま縁にも座敷にも泥足の跡が付いているので、賊の入つたことは証拠立てられた。

そこで八方へ人が飛んだ。しかし賊は見付からなかつた。

そうして何を盗まれたものか、かいくれ見当がつかなかつた。

と云うのは金にも器類にも、紛失したものが無いからであつた。

19

ちょうど同じ夜の出来事である。

岡山頭巾で顔を包んだ、小兵の武士が供もつれず、江戸の街を歩いていた。

すると、その後を従^つけるようにして、十人ばかりの屈強の武士が、足音を盗んで近寄^つて来た。

覆面の武士は幕府の重鎮勝安房守安芳^{かつあわのかみやすよし}で、十人の武士は刺客なのであった。

今日の東京の地図から云えば、日本橋区本石町^{ほんごくちやう}を西の方へ

向かって歩いていった。室町を経て日本橋へ出、京橋を通つて銀座へ出、尾張町の辻を真直ぐに進み、芝口の辻までやつて来た。

この間二三度刺客達は、討ち果そうとして走りかかったが、安房守の威厳に搏うたれたものか、いつも途中で引き返してしまった。だが一体何のために勝安房守を殺そうとするのだろうか？ そうして一体刺客達は、どういう身分の者なのだろう。

それを知りたいと思うなら、当時の歴史を調べなければならぬ。
い。

慶けいおう応三年九月であつたが、土佐の山やまの内うち容よう堂どう侯は、薩長二

藩が連合し討幕の計略をしたと聞き、これは一大事と胸を痛めた。そこで一通の建白書を作り、後藤象二郎ごとうしょうじろう、福岡孝悌ふくおかこうてい、この

二人の家臣をして將軍慶喜に奉らしめ、平和に大政を奉還せしめ、令政をして一途に出でしめ、世界の大勢に順応せしめ、日本の国威を揚げしめようとした。そこで慶喜は十月十三日、京都二条城に群臣を集め、大政奉還の議を諮詢しじゆんした。その結果翌十四日、いよいよ大政奉還の旨を朝廷へ対して奏聞そうもんした。一日置いた十六日朝廷これを嘉納した。つづいて同月二十四日、慶喜は更に將軍職をも、辞退したき旨奏聞したが、これは保留ということになった。

さて一方朝廷に於ては、施政方針を議定するため、小御所こごしよで会議を行なわせられた。なかやまただよし中山忠能、おおぎまちさねなる正親町實愛、とくだいじさね徳大寺實則、いわくらしともみ岩倉具視、とくがわよしかつ徳川慶勝、まつだいらよしかけ松平慶永、しまづよしひさ島津義久、

やまのうちようどう
 山内容堂、西郷隆盛、大久保利通、後藤象二郎、福
 くおかこうてい
 岡孝悌、これらの人々が参会した。十二月八日のことであつ
 た。その結果諸般の改革を見、翌九日、天皇親臨、王政復古の
 大号令を下され、徳川幕府は十五代、二百六十五年を以て、政權
 朝廷に歸したのであつた。

慶喜に対する処置としては、内大臣を辞すること、封土一切を
 返すべきこと、この二カ条が決定された。

旧幕臣は切齒した。慶喜としても快くなかつた。会桑二藩は
 特に怒つた。突然十二月十二日の夜慶喜は京都から大坂へ下つた。
 松平容保、松平定敬、他幕臣が従つた。

こうして起つたのが維新史に名高い伏見鳥羽の戦いであつた。

明治元年正月三日から、六日に渡つて行なわれたのであつた。そうして幕軍大いに潰え、六日夜慶喜は回陽丸に乗り、海路江戸へ遁竄した。

ここでいよいよ朝廷に於ては、慶喜討伐の大軍を起され、江戸に向けて発することにした。有栖川宮熾仁親王を征東大総督に仰ぎまつり、西郷隆盛参謀、薩長以下二十一藩、雲霞の如き大軍は東海東山、北陸から、堂々として進出した。そうして三月十五日を以て、江戸総攻撃と決定された。

江戸はほとんど湧き返つた。旗本八万騎は奮起した。薩摩と雌雄を決しようとした。しかし聡明な徳川慶喜は、懦弱に慣れた旗本を以て、慄悍な薩長二藩の兵と、干戈を交えるということの、

不得策であることを察していた。それに外国が内乱に乗じ、侵略の野心を逞しゆうし、大日本国の社稷しゃしよくをして危からしめるということを、特に最も心痛した。そこで幕臣第一の新知識、勝安房守に一切を任せ、自身は上野の寛永寺に蟄居し、恭順の意を示すことにした。

初名よしくに義邦、通称は麟太郎りんたろう、後安芳やすよし、号は海舟かいしゅう、幕末じゆういげあわのかみ従五位下安房守となり、軍艦奉行、陸軍総裁を経、さらに軍事取扱として、幕府陸海軍の実権を、文字通り一手に握っていたのが、当時の勝安房守安芳であった。武術は島田虎之助に学び、蘭学は永井青涯に師事し、一世をむなし空うする英雄であったが、慶喜に一切を任せられるに及び、大久保一翁、山岡鐵舟などと、東奔西

走心胆を砕き、一方旗本の暴挙を訓め、他方官軍の江戸攻撃を食くい止めようと努力した。

幕臣の中過激な者は、その安房守の遣り口を、手ぬるいと攻撃するばかりでなく、徳川を売って官軍に従つく獅子身中の虫だと云つて、暗殺しようときえ企てた。

それを避けなければならなかつた。

日々幕兵は脱走した。それを引き止めなければならなかつた。

で、この夜もただ一人府内ふないの動静を探ろうとして、こうして歩いているのであつた。

芝口の辻を北へ曲がり安房守あわのかみは悠々と歩いて行つた。

しもさくらだ
下桜田まで来た時であつた。ふと彼は足を止めた。その機会を狙つたのであろう、刺客の一人が群を離れ、颯さつと安房守の背後に迫つた。

と、突然安房守が云つた。

「うむ、日本は大丈夫だ！ この騒乱の巷の中で、三味線を弾いている者がある。うむ、曲は『山姥やまうば』だな。……唄声にも乱れない。撥ばちさばきも鮮あざやかなものだ。……いい度胸だな。感心な度胸だ。人は須すべくこうなくてはならない。蠢動するばかりが能ではない。亢奮するばかりが能ではない。宇内うだいの大勢も心得ず、人斬包

丁ばかり振り廻すのは人間の屑と云わなければならぬ。……いい音締だな小気味のよい音色だ」

それは呟いているのではなく、大声で喋舌しゃべつていたのであつた。背後に迫つて来た刺客の一人へ、聞かせようとして喋舌しゃべつていらしい。

宵ながら町はひっそりと寂れ、時々遙かの方角から脱走兵の打つらしい小銃の音が響いてきたが、その他には犬の声さえしない。その静寂を貫いて、咽ぶがような、清元の音色が、一脈綿々と流れてきた。

刺客の一人は立ち止まり、じつと安房守を見守つた。その安房守は背を向けたまま、平然として立っていた。まことに斬りよい

姿勢であつた。一刀に斬ることが出来そうであつた。

それなのに刺客は斬らなかつた。一間ばかりの手前に立ち、ただじつと見詰めていた。彼は機先を制されたのであつた。叱咤するような安房守の言葉に、強く胸を打たれたのであつた。しかし今にも抜き放そうとして、しつかり握っている右の手を柄から放そうとはしなかつた。

「斬らなければならぬ！ たたつ斬らなければならぬ！ 二股武士、勝安房守！ かつあわのかみ だが不思議だな、斬ることが出来ない」
刺客の心は乱れていた。

と、唄声がはつきり聞こえた。

雁がとどけし玉章は、たまづさ 小萩の袂たもとかるやかに、へんじ 返辞しお

んも朝顔の、おくれさきなるうらみわび……

安房守は立っていた。同じ姿勢で立っていた。それからまたも喋舌り出した。

「女ではない、男だな。しかも一流の太夫らしい。一流となれば大したものだ。政治であれ剣道であれ、遊芸であれ官教であれ、一流となれば大したものだ。もつとも中には馬鹿な奴もある。剣技精妙第一流と、多くの人に立てられながら、物の道理に一向昏く無闇と人ばかり殺したがる。この安^{やすよし}芳をさえ殺そうとする。馬鹿な奴だ。大馬鹿者だ。今この安芳を暗殺したら、慶喜公の御身はどうなると思う。徳川の家はどうなると思う。俺は官軍の者どもに、お命乞いをしているのだ。慶喜公のお命乞い。……俺

の命などはどうなってもよい。俺はいつもこう思っている。北ほうじ
ようよしとき 条義時に笑われまいとな。実に義時は偉い奴だ。天下泰平の
 そのためには、甘んじて賊臣の汚名を受け、しかも俯仰ふぎようてんち天地に
 恥じず、どうどうと所信を貫いた。……俺は義時に則のつとろうと思う。
 日本安全のそのためには、小の虫を殺し大の虫を助け、敢て賊子ぞくし
 に堕ちようと思う。……どだい薩長と戦って、勝てると思うのが
 間違いだ。いかんともしがたいは大勢だ。社会の新興勢力は、ど
 んなことをしても抑制出来ぬ。王政維新は大勢だ。幕府から人心
 は離れている。それはもう旧勢力だ。利益のなくなった偶像だ。
 徳川の天下も二百六十年、そろそろ交替していい時だ。偶像を拜おが
 むのは惰性に過ぎない。こびり付くのは愚の話だ。新時代を逃が

してはいけない。日本を基礎にした世界主義！ 国家を土台にし

た国際主義！ これが当来の新思想だ。仏蘭西フランスを見ろ仏蘭西を！

ナポレオン三世の奸雄かんゆう振のいかに恐ろしいかを見るがいい！

日本の国土を狙っているのだ。内乱に乗じて侵略し、利権を得

ようと焦心あせつていではないか。それだけでも内乱を止めなければ

ならない。……第一江戸をどうするのだ。罪のない江戸の市民

達を。兵戦にかけて悔いなのか。いやいやそれは絶対にいけな

い。江戸と市民は助けなければならぬ。そうして徳川の大屋台

と慶喜公とは助けなければならぬ。……どいつもこいつも血迷

っている。醒めているのは俺だけだ。俺がそいつらを助けなかつ

たら、一体誰が助けるのだ。俺を絶対に殺すことは出来ぬ。殺し

だが最後日本は闇だ。……官軍の中にも解^{わか}る奴がいる。他でもない西郷だ。西郷吉之助ただ一人だ。で俺はきやつに邂逅^{ゆきあ}い、赤心を披瀝して談じるつもりだ。解^{わか}ってくれるに相違ない。そこで江戸と江戸の市民と、徳川家と慶喜公とは、助けることが出来るのだ。その結果内乱は終息し、日本の国家は平和となり、上下合一、官民一致、天皇帰一、八紘^{こくわう}一字^{いち}、新時代が生れるのだ」

21

安房^{あわの}守^{かみ}はじつと耳を澄ました。

空では星がまばたいていた。ふと小銃の音がしたが、しかした

つた一発だけであつた。

清きよもと元の唄はなお聞えた。

「ああいいなあ。名人の至芸しげいだ」安房守は嘆息した。それから大声でやり出した。「俺はもとからの江戸っ子だ。俺の好きなのは平民だ。勝麟かつりんたろう太郎、これでいいのだ。つめて云うと勝麟だ。従五位も無用なら安房守も無用だ。勝麟々々これでいいのだ。だがそう云つてはいられない。勝麟では済まされない。世間の奴らが酔つていて、俺一人醒めているからよ。そこで救世と出かけたのだ。厭な役廻りだがしかたがない。扶桑ふそう第一の智者と称し、安房の国の旋陀羅せんだらの子、聖日蓮セントにちれんは迫害を覚悟で、世の荒波へ飛び出して、済民さいみんの法を説いたではないか。現代第一の智者と云え

ば、この俺の他にはない。つまり俺は日蓮なのだ。つまり俺は祖そ師しなのだ。その祖師様を殺そうとは、とんでもない不屈者だ。すぐに仏罰を蒙ろうぞ。……ああ、だが、本当に、いい音色だなあ。……」

春の夜風がそよぎ出した。

手近の木立で小鳥が啼いたが、きつと夢でも見たのだろう。

なまめかしい春の夜の、甘い空気を顫わせて、艶な肉声と三味線の音とは、なおあざやかに聞こえていた。

刺客は頭をうな垂れた。柄を握っていた右の手は、いつかダラリと下っている。と、一足しりぞいた。それからグルリとむきを変えると、もと来た方へ引っ返した。

その時、安房守は振り返った。

「これちよつと待て、伊庭八郎！」

「はっ」と云うとその刺客は、足を止めて振り返った。うら若い

美貌の武士であり、それは伊庭八郎であつた。八郎は父軍兵衛と

共に、この時代の大劍豪、さいとうやくろう 齊藤弥九郎、千葉周作、ももいしゆんぞ 桃井春

蔵、う 近藤勇、山岡鐵舟、さかきはらけんきち 榊原健吉、これらの人々と並称さ

れている。身、幕臣でありながら、道場をかまえて門下を養い、

心形刀流を伝えたが、直門二千名に及んだという。

幕臣も幕臣、奥詰めだったので、親衛隊の魁さきがけであり、伏見鳥羽

の戦いにも出て、幾百人となく敵を斬った。

その彼は直情の性格から、同じ幕臣の勝安房守が、いわゆる恭

順派の総師として、薩長の士と交渉することを、徳川家のために齒搔く思い、獅子身中の虫と感じ、いつそ暗殺して害をのぞこうと、日頃から画策していたのであったが、この夜いよいよ断行すべく、門下の壮士九人を率い勝安房守の後をつけ、剣を揮おうとしたのであった。

「どうだ、少しは解わかったかな？」安房守は微笑した。

しかし八郎は黙っていた。

「ないない」と安房守は穏やかに云った。「勿論全部は解らないだろう。だがこの俺を殺すことの、理不尽だという事は解つたらしいな」

「はい、さようにございます」伊庭八郎は一礼した。「見損ない

ましてございます」

「世の中は近々平和になるよ。だが今後とも小ぜりあいはある。幕臣たる者は油断してはならない。八郎、お前、久能山くのうざんへ行け！ 函嶺かんれいの険けんを扼やくしてくれ！」

「それは、何故でございますな？」

「二三日中に西郷と逢う。そうして俺は談判する。俺の言葉を入れればよし、もし不幸にして入れなかつたら、幕府の軍艦を一手に集め、東海道の薩長軍を、海上から俺は殲滅して見せる。函根はこね、久能山は大事な要害だ。敵に取られては面白くない。……まあ八郎聞かがいい、どうだ冴え切った三味線ではないか」

「よい音色でございますな」

思わず八郎も耳を澄した。

遠くで二つバンが鳴っていた。

どこかに火事でもあると見える。

しめやかに三味線はなお聞えた。

にわかには八郎は呻くように云つて、

「これは不思議！ 剣気がござる！」

「ナニ剣気？ ほんとかな？」安房守は眼を見張った。

「これは只事ではございません」

「お前は剣道では奥義の把持者だ。はじしや俺などよりずっと上だ。お前

がそう云うならそうかもしれない」

「これは危険がせまって居ります」

「ふうむ、そうかな。そうかもしれない」

「これは助けなければなりません」

八郎は背後を振り返り、手を上げて門下を呼んだ。

曲は終りに近づいてきた。

毛脛けずね屋敷の床の下に、大きな地下室が出来ていた。

この屋敷が建てられたのは、正保しょうほ年間のことであつて、慶安

謀反の一方の将軍、金井半兵衛正国かないはんべえまさくにがずっと住んでいたという

ことであつた。で、恐らく地下室は、その時分に造られたもので

あろう。素行山鹿やまがじんごえもん甚五右衛門の高弟、望月作兵衛もちづきさくべえもそこに住み

著述をしたということであるが、爾来幾度か住人が変わり、建物

も幾度か手を入れられたが、天保てんぽうになつて一世の劍豪、千葉周作政成の高弟、宇崎三郎が住んだことがあつたが、この時代から怪異があつたと、翁おきなぞうし双紙などに記されてある。本所七不思議のその中にも、毛脛屋敷というのがあるが、それとこれとは別物なのである。

百目蠟燭が地下の部屋の、一所に点つていた。

黄色い光がチラチラとだだっ広い部屋を照らしている。

かすか幽ではあつたが三味線の音が、天井の方から聞えてきた。

十四五人の人間がいる。

そうして氣絶した美しい紫錦が、床の上にたお仆れていた。

「ふん、こうなりやアこつちの物さ。……三ピンめ、驚いたろう」
こう云つたのは源太夫であつた。「だが案外手強かつたな、唄
うたいにや似合わねえ」

「坊主の六めどうしたかな」こう云つたのは小鬢の禿た四十年輩
の小男であつた。「三ピンめに一太刀浴びせられたが」

「ナーニ大丈夫だ、死くたばりやアしねえ。死つた所で惜しかアねえ」
もう一人の仲間がこう云つた。

「三ピンめ、さぞかし驚いたろう」源太夫は繰り返した。「よも
や地下室があらうとは、仏さまでも知るめえからな。消えてなく

なつたと思つたろうよ。……紫錦しきんめ、そろそろ目を覚さねえかな」

紫錦は気絶からまだ醒めない。グツタリとしてたお仆れていた。髪が崩れて額へかかり、蠟燭の灯に照らされていた。

源太夫はじつと見詰めていたが、溜息をし舌なめづりをした。

「だが親方はどうしただろう？」

もう一人の仲間が不安そうに云つた。

「大丈夫だよ、親方のことだ、ヘマのことなんかやるはずはねえ」

「それにえて物を連れて行つたんだからな」

「あいつときたら素ばしっこいからな」

二三人の仲間が同時に云つた。

地下室は寒かつた。蠟燭の灯がまたた瞬いた。

「酒を呑みたいなあ」と誰かが云った。

「まあ待ちな、もう直ぐだ。なんだか知らねえが親方が宝箱を持つて来るんだとよ」

「何が入っているんだろう？」

「小さな物だということだ」

「で、うんと金目なんだな」

「一度にお大^{だいじん}尽になるんだとよ」

「源公！」

と一人が呼びかけた。「ひどくお前は幸福そうだな。思う女を取り返したんだからな。……幸福って物ア直ぐに逃げる。今度逃がしたら取り返しは付かねえ」

源太夫はそつちへ眼をやつた。

「ふん、女に惚れているんだな」

「あたりめえだ、惚れてるとも、だから苦心して取り返したんだ」
「だが宜よくねえぜ、そういう惚ほれ方は、古い惚れ方っていうやつだ」

源太夫はその眼を光らせたが

「じゃ何が新らしいんだ」

「お前は承知させて、それからにしようって云うんだろう？　だめだよだめだよそんなことは……」

「俺には出来ねえ、殺生な真似はな」

「じゃあお前は縮しくじる尻ぢぜ」

源太夫は返辞いりりえをしなかつた。

「叩かれると犬は従ついて来る。撫さすると犬は喰らいつく。……」

源太夫は考え込んだが、突然飛び上り喚声をあげた。

「お前の云うことは嘘じゃねえ！」

23

この時二階の一室では、最後の節が唄われていた。

こぼりよしや小堀義哉の心の中は泉のように澄んでいた。

なんの雑念も混じっていない。死に面接した瞬間に、人間の真価は現われる。驚くもの恐れるもの、もがくもの泣き叫ぶも

の、そうして冷やかに傍観するもの、又突然悟ごにゆう入するもの、しかし義哉の心持は、いずれにもはまっていなかった。彼は三味線の芸術境に、没頭三昧することによつて、すべてを忘れていたのであつた。

『山姥やまうば』の曲が終ると同時に、彼は死ななければならなかつた。そうして殺し手が白刃を提さげ、彼の背後に立つていた。

時はズンズン経つて行つた。

もう直ぐ曲は終わるのである。

露つゆにもぬれてしつぽりと、伏猪ふすいの床の菊がさね……

彼は悠々と唄いつづけた。

異風変相の浪士達にも、名人の至芸は解わかると見えて、首を垂れ

て聞き惚れていた。

独楽師に扮した一人の浪士は「旨い！」と思わず呟いた、居合抜にやつ扮したもう一人の浪士は、「ウーン」と深い呻声を洩らし、商人に扮した二人の浪士は顔と顔とを見合わせた。

一座の頭領と思われる、琵琶師風の一浪士は、刀の柄を握ったまま堅くその眼を閉じていた。

時はズンズン経って行った。

伊庭八郎とその同志は、勝安房守の指図の下に、毛脛屋敷の表戸を、踏み破ろうと待ち構えていた。

「まず待まつがよい」

と安房守は云った。「めったに聞けない名人の曲だ。唄い終え

るまで待つとしよう」

それで、一同は鳴りを静め、三味線の絶えるのを待っていた。

さてそれから行なわれたのが、その当時の人が噂した所の「毛脛屋敷の大捕物」であり、そうして後になってその捕物が「仙人壺」というものに関係あり、と知り、改めて「大捕物仙人壺」と呼んだ、その風変りの捕物であった。

何故この捕物が風変わりであり、何故有名になったかというに、先づ第一にそれを指揮した者が、勝海舟という大人物であり、捕物の衝しょうにあたった人物が、伊庭八郎とその門下という、これも高名の人々だったからで。……

そうして捕えられた者共が、千代田城へ放火しようとした精悍

な浪士の一群と、当時江戸を騒がせていた、鼬いたち使いの香具師やし一派という、風変わりの連中であつたからである。

しかし捕物そのものは、まことに簡単に行なわれた。

即ち伊庭八郎一派の者が、三味線の音の絶えると同時に、毛脛屋敷へ乱入するや、浪士の群は狼狽し、逃げようとして犇ひしめくところを、あるいは斬り、あるいは捕縛し、その物音に驚いて、地下室にいた源太夫一味が、周章あわてて遁がれようとするところを、これも斬つたり捕えたりして、一人のこさず狩取つた迄であつた。その結果お錦と小堀義哉とは、命を助かることが出来た。

香具師の親方「釜無しの文」だけは、ちようどそこに居なかつたので、これも命を助かつた。

その夜の明け方小堀義哉こぼりよしやは、自分の屋敷へ帰つて来た。そこで盗難の話聞いた。これという物も盗まれなかったが、お錦きんから預かつた不思議な手箱を、一つだけ盗まれたということ、小間使のお花から耳にした。

「ふうむそうか、ちよつと不思議だな」

義哉は小首を傾けた。「金も取らず衣類も盗まず、手箱を奪つたというのには、何か理由がなければならぬ」

しかし彼には解わからなかつた。

「お錦殿には氣の毒だが、打ち明けるより仕方あるまい」

で、お錦の来るのを待った。しかし翌日も翌々日も、お錦の姿は見えなかった。

「ああいう事件があつた後だ、多少体を痛めたのかもしれない」
無理もないことだと思ふのであつた。

その翌日のことであつたが、一日暇を戴きたいと、小間使いのお花が云い出した。

「ああいいとも、暇を上げよう。親元へでも帰るのかな」

「はい、あの神田の兄の許へ」

「おおその神田の兄さんとやらは、お上のご用を聞いているそうだな」

「はい、さようでございます」

「ゆつくり遊んで来るがよい」

「はい、それでは夕景^{ゆうけい}まで」

小さい風呂敷の包を抱き、小間使のお花は屋敷を出た。

神田小川町の奥まった露路に、岡引の友蔵の住居があつた。荒い格子には春^{しゅん}昼^{ちゆう}の陽が、鮮^{あざやか}に黄色くあたっていた。

「嫂^{ねえ}さんこんにちわ」と云いながら、お花は門の格子をあけた。

「おやお花さん、よく来たね」声と一緒にあらわれたのは、友蔵の家内のお巻^{まき}であつた。三十前後の仇っぽい女で、茶屋上りとは一眼で知れた。

「これはお土産、つまらない物よ」

「よせばよいのに、お気の毒ねえ」

「それはそうと兄さんはいて。妾ちよつと用があるのよ」

「おお、お花か、何だ何だ」

これは友蔵の声であつた。

友蔵は茶の間の長火鉢の前で、湯呑で昼酒を飲んでいた。四十四がらみの大男で、凶悪の人相の持主であつた。下つ引の手合も今日はいず、一人いい気持に酔っていた。

朝風呂丹前長火鉢、これがこの手合の理想である。しかし岡つ引の手あてといえ、一月一分か一分二朱であつた。それでは小使にも足りなかつた。その上岡つ引は部下として、下つ引を使わなければならなかつた。その手あてはどこからも出ない。自分が

出さなければならなかった。そこで勢い岡つ引は他に副業を求め
るか、ないしは地道の町人をいたぶり、賄賂わいろを取らなければ食つ
て行けなかった。

ところで友蔵には副業がなかった。そこで町人を嚇おどしては、収し
ゆうわい 賄ゆうわいをして生活くらししていた。

「兄さん」とお花は茶の間へ入ると、風呂敷包をサラリと解いた。
「見て貰もらいたいものがありますのよ。この手箱なの、どう思つて
？」

伊丹屋いたみやのお錦が「爺おやつあん」から貰もらい、小堀義哉に預けた所の、
例の手箱を取り上げた。

「変へん哲てつもねえ杉の箱じゃあねえか、これが一体どうしたんだい

？」友蔵は手箱を取り上げた。

「何でもないので、見掛けはね。でもちよつと変なのよ」

お花はそこで説明した。

先夜小堀義哉の家へ、変な泥棒が入ったこと、金も衣類も持つて行かずに、この箱ばかり狙ったこと、そこで策略を巡らして、泥棒に贖物を握らせた事、そうして本物は窃りこっそと、自分が隠して置いた事、義哉へ箱を預けたのが、日本橋の大老舗おおしにせ、伊丹屋の娘だということなどを、細々こまこまと説明したのであった。

「ふうむ、そうかい、なるほどなあ。そう聞くとちよつと不思議だなあ。とんだ手蔓てづるにぶつかるかもしれねえ。だが何にしても蓋ふたをあけて、中味を拝見しなけりやあ」

そこで錠前をコヂ開けようとした。しかし錠は開かなかった。「こいつアいけねえ、千枚錠だ。どんなことをしても開くものじやあねえ。千枚錠ときたひにやあ、合鍵だつて役に立たねえ。箱を潰すのはワケはねえが、中味が何だか解わからねえからな、そいつもちよつと手控えだ。……ところで鍵はなかつたのかい？」

25

「ええ、それがなかつたんですよ」

「探したらどこかにあるだろう。帰つて窺こっそり探して見な」

「そうねえ、それじゃ探してみよう」

永い春の日の暮れかかった頃、お花は屋敷へ帰って行つた。

数日経つたある日のこと、駕籠に乗つた伊丹屋のお錦きんが、義哉よしやの屋敷へ訪れて来た。

その後やはり気分が悪く、今迄寝ていたということであつた。

「これでございますの、手箱の鍵は」

お錦はこう云つて鍵を出した。

義哉はそこで事情を話した。

「おや、マアさようでございましたか」お錦は意には介しなかつた。元々気味の悪い老人から、偶然貰つた手箱なのである。たいして惜しくも思わないのであつた。それより彼女には義哉その人

が、このもしくはも愛しくも思われるのであった。

二人は尽きず話をした。

伊丹屋の養女だということや、許嫁いなづけが生地なしだということや、生活くらしが退屈だということや、

——お錦はそんなことを問わず語りに話した。

「妾わたくし、近々伊丹屋の家を、出てしまいかもしれませんの」

「あなたが伊丹屋のお家を出て、一人住みでもなされたら、江戸中の若い男達は、相場を狂わせるでございましょうよ。……そうして貴女あなたは江戸中の女から、妬そねまれることでもございましょうよ」

「お口の悪い何を仰おっしゃ有るやら。……でもきつと貴郎様は、おさげすみなさるでございましょうね。そうしてもうもうお屋敷へな

ど、お寄せ付けなされはしますまいね」

「どう致しまして私など、こつちから日参いたします」

「まあ嬉しゅうございますこと、嘘にもそう云つていただけると、どんなに心強いことでしょう」

塀外を金魚売が通つて行つた。そのふれ声が聞えてきた。それは初夏の訪れであつた。

後庭こうていには藤が咲きかけてい、池の畔みぎわの燕子花えんしかも、紫の蕾を破ろうとしていた。

すると、その時縁側の方から、微かすかな衣擦れの音がした。

「お花か!!」と義哉は氣不味きまずそうに云つた。

「はい、お呼びかと存じまして」

「呼びはしない。向うへ行つておいで」

お花の立去る氣勢けはいがした。

鍵を義哉へ預けたまま、お錦も間もなく帰つて行つた。

その翌日の夕方であつた。

神田小川町の友蔵の家へ、お花はとつかわと入つて行つた。

「兄さんこれなのよ、手箱の鍵は」こう云つてお花は鍵を出した。

お錦が義哉へ預けて行つた、例の手箱の鍵であつた。ちよつと隙を窺つて、それをお花が盗み出したのである。

「どれ」と云うと友蔵はお花の手から鍵を取つた。それから立ち上つて隣部屋へ行き、地袋じぶくろから手箱を取り出して来た。

固唾を吞まざるを得なかつた。何が箱から出るだろう？ 高価

な品物であろうかも知れぬ。それとも恐ろしい秘密だろうか？

友蔵は鍵を錠へかつた。と、カチリと音がして、箱の蓋がポンと開いた。

一葉の地図が入れてあつて、そうしてその他には何にも無かつた。

「地図じゃないの、つまらない」

お花はガツカリして声を上げた。

26

「そうでねえ」と友蔵は云つた。彼は岡っ引という商売柄、こう

いうものには興味があつた。そうして恐らくこの地図には、秘密があろうと考えた。

「うむ、こいつあ甲州の地図だ。……ははあ、こいつが釜無川だな。……おおここに記号しるしがある」

釜無川の川岸に朱で二重丸が入れてあつた。

で、友蔵は腕を組み、じつと何かを考え込んだ。

さてその翌日の早朝であつたが、甲州街道を足早に、甲府の方へ下る者があつた。他ならぬ岡っ引の友蔵で、嚴重に旅の装いをしていた。

すると、その後から見え隠れに、一人の旅人が尾つ行けて行つた。

それを友蔵は知らないらしい。

道中三日を費やして、友蔵は甲府の城下へ着いた。

旅籠へ泊った友蔵は、りようがけ両掛からこつそり地図を出し、あら

ためて仔細に調べ出した。

すると、隣室の間の襖が、あるかなしかに細目に開き、そこから鋭い眼が見覗みのぞいた。様子を窺っているのであった。

翌日早朝友蔵は、釜無の方へ出かけて行つた。しのぶのごう忍野郷を出外

れるともう釜無の岸であつた。土手に腰かけて一いっぶく吹した。それから四辺あたりを見廻したが、人の居るらしい氣勢けはいもなかつた。用意し

て来た鍬ひっさを提げ地図を見い見い歩いて行つたのは、川の岸寄りの中洲であつた。

彼は熱心に掘り出した。やがて何か鍬の先に、カチリとあたる音がした。どうやら小石ではないらしい。手を差入れて引き出して見た。土にまみれた小さい壺が、その指先につつまれていた。「なんだえこれは壺じゃアねえか。呆れもしねえ莫迦にしていやがる。小判の箱かと思つたに。天道様も聞こえませぬ。一体どおしてくれるんだい。旅費を使つて江戸くんだりから、わざわざ甲府へ来たんじやアねえか。巫山ふざけ戯けているなあ、え、本当に。……だが待てよ、そうも云えねえ。これに秘密があるのかもしれない。形は小さい壺ながら、忽然化けて千両箱となる。なあんて奇蹟が行なわれるかもしれねえ。よしよしともかく宿へ帰り、仔細に調べることしよう」

で、鍬を川へ投げ捨て、壺に着いている土を払うと、懐中へ納めて歩き出した。

夕飯を食べ風呂へ入り、床を取らせると女中を退けた。

それから壺を取り出した。ためつすがめつ調べたが、何の変つた所もなかつた。丈三寸、周囲三寸、掌に載る小壺であつた。焼にも変つた所がない。ただし嚴重に蓋が冠せてあつて、取ろうとしてもなかなか取れない。

「つまらねえなあ。虻あぶはち蜂とらずだ」

小言を云いながら振つて見たが、中には何にも入っていないと見え、コトリとも音はしなかつた。

「一世一代の失敗かな。友蔵親分丸損かな。ほんとにほんとに莫

迦にしていやがら」

しかしどんなに悪口を云つても、それに答えるものさえない。

自分自身が悪口を云い、自分自身が聞くばかりであつた。

夜は次第に更けまさり、家の内外ひっそりとした。

「考えていたつて仕様がねえ。こんな晩は寝た方がいい。明日は早速ご出立だ。お花の畜生め覚えていやがれ。彼奴あいつさえあんな物を持って来なければ、こんなハマは見ねえんだ。江戸へ帰つたらあいつを呼び付け、みつしり叱つてやらなければならねえ」

夜具を冠つて寝てしまった。

いわゆる丑満の時刻になつた。

と、あいふすま間の襖が開き、何かチロチロと入つて来た。それは一匹の

大黽いたちであつて、颯さつと床間とこのまへ駈け上ると、壺と地図とを両手で抱え、それから後足で立ち上り、静かに隣部屋へ引返した。

友蔵は勿論知らなかつた。しかし翌日発見した。発見はしたが驚かなかつた。「へん、間抜けな泥棒め、盗むものに事をかき、あんなつまらねえ物を盗みやがつた」

それで、却つてサバサバして、江戸をさして引返して行つた。

27

ここは深川の木賃宿である。香具師やの親方しの「釜無の文」は、手下の銅助を向うに廻し、いい氣持に喋舌しゃべつていた。傍に檻が置

いてあり、中に大鼯が眠っていた。

二人の前には壺と地図とが、大切そうに置いてあった。

窓から夏の陽が射していて、喚気法の悪い部屋の中は、汗ばむ程に熱かった。

「……と、つまり、云うわけさ。ナーニ、ちよろりと横取りしたのさ。へん、えて物さえ使ったらどんな宝物だって盗まれるんだからな」

得意そうに文は話し出した。

「ところで親方、その壺には、何が入っているんですえ？」こう不思議そうに銅助は訊いた。姦悪の相の持主で、文に負けない悪党らしかった。

「そいつア俺にも解らねえ」文は渋面を作ったが、「福の神だということだ。とにかくこいつを持っていると、いい目が出るといふことだ……これはな、伝説による時は、支那から渡ったものだそうな。甲府のお城にあったものさ。元禄げんろく時代の將軍家、館たてば林やしの綱つなよし吉様が、ある時お手に入れられた所、間もなく江戸城お乗込み、將軍職に就かれたそうさ。そのお気に入りの柳沢侯、最初は微祿であられた所が、この壺を借りたその日から、トントン拍子に出世されたそうさ。……で、この壺はそれ以来、甲府勤番御支配頭の、保管しよくに囑しよくしていたものだそうさ。そうして甲府城の土蔵の奥に大切に仕舞しまつて置かれたんだそうさ。……そいつを「爺とつつあん」が盗み出したのよ」

「へえ「爺つあん」？ 葉村はむらのかえ？」

「うん、そうさ、あの葉村のな。……今こそ玉乗たまのりの親方か何かで、真面目に暮らしているけれど、昔はどうして大悪党よ、俺ら以上の悪党だったのさ」

「だがおかしいね、その「爺つあん」が、どうして手に入れた宝壺を、釜無の岸へなんか埋めたんだろう？」

「そいつア俺にも解らねえ」

「それに本当にその壺が、そんなに大した福の神なら、あの葉村の「爺つあん」も、もつと出世していいはずだが、たいして出世もしねえようだね」

「うん、そう云やアその通りだが、そこにはい日わくがあるんだろう。

豚に真珠という格言もあらあ、せつかくの宝も持手が悪いと、ねつから役に立たねえものさ」

「今度は親方が手に入れたんだ、どうかマア旨く役立つといいが」
「役立つとも役立つとも。俺らきつと役立たせてみせる。伝説によるとこの壺は夜な夜な不思議をするそうだ」

「へえ、不思議をね？　どんな不思議だろうな」銅助は怪訝な顔をした。

「そいつも今の所わからねえ。この福の神を手に入れてから、まだ一晩も寝て見ねえんだからな」

「そうすると今夜が楽しみです。小判の雨でも降るかもしれねえ」

宝壺！ 宝壺！ ほんとに怪異など起きだすだろうか？

果然怪異は起こったのであった。

深夜、壺は音楽を奏した。

非常に微妙な音楽であつた。

同時に人々は亢こうふん奮ふんした。鼬いたちが檻を食い破り、主人の喉笛へ喰

らい付いた。

それは決して福の神ではなく、むしろ災難わざわいの神であつた。

「釜無の文」は喰い殺された。

次にこの壺を手に入れたのは、文の手下の銅助であつた。

「うん、俺は大丈夫だ。きつと福の神にして見せる」

で、それを枕元へ置き、安らかに眠つたことである。

すると、音楽が聞こえてきた。彼はにわかには胸苦しくなり、無むちゆう宙で飛び起きて駈け廻った。

そうして柱へ頭を打ちつけ、血を吐いて死んでしまった。

損をしたのは木賃宿の亭主で、その月の宿賃をフイにした。そこで銅助の持物を一切バツタに売ることにした。

そこで、その壺と付属地図とはある古道具屋の手に渡った。

この間に世間は一変し、世は王政維新となり、そうして奠てんと都が行なわれた。

江戸が東京と改名され、大名はいずれも華族となり、一世の豪傑かつあわのかみ勝安房守も、伯爵の栄爵を授けられた。

ところで義哉よしやはどうしたろう？

義哉は清元たゆうの太夫となつた。

ところでお錦きんはどうしたろう？

お錦の身の上にも変化があつた。まず許いいなづけ嫁よめの伊太郎いたろうが、肺を病んで病没した。そうして大家伊丹屋は、維新の変動で没落した。

そこで、お錦は自然の勢いで、小堀義哉の女房となつた。二人にとつてはこのことは、願つてもない幸いであつた。勿論きんしつ琴瑟しつ相和した。

義哉の芸名は延えんだゆう太夫と云つた。

即ち清元きよもと延えん太夫だゆうである。もとが立派な旗本で、芸風に非常な

気品があつた。それが上流に愛されて、豊かな生活をする事が出来た。

貴顕きけん富豪ふごうに持て囃はやされ、引つ張り凧の有様であつた。

勝海舟は風流人で、茶屋の女将や相撲取や諸芸人をひいきにした。そこで、延太夫の小堀義哉も、よく屋敷へ招かれた。

28

ある日延太夫えんだゆうは常時いっしょのように、海舟の屋敷に招かれた。

「時に先生、不思議なことがあります」こう云うと延太夫は懐中から小さい壺を取り出した。「実は小石川の古道具屋で、手に入

れたものでございますが、奇怪なことには深夜になると、音を発するのでございます。それが、しかも音楽なので。……」

「ほほう、そいつは不思議だな」こう云いながら海舟は、小さい壺を手に執とつた。

「別に変つた壺でもないが」

すると座に居た尚古堂しょうこどうが「拝見」と云つて受け取つた。

尚古堂は本姓を本居もとおりのぶひさ信久、当時一流の好事家で、海舟の屋敷へ出入りをしていた。

じつと壺に見入つたが、

「や、これは仙人壺だ！」驚いたように声を上げた。

「仙人壺だつて？ 妙な名だな。古事来歴を話してくれ」海舟は

こう云つて微笑した。

「宋朝古渡りの素焼壺で、吉凶共に著いちじるしいもの、容易ならぬ器でございます」尚古堂は気味悪そうに云つた。夜な夜な音を発するのは、焼の加減でございまして、質の密度が夜気の変化で動揺するからでございます。これは不思議でございませぬ。ちようど茶釜が火に掛けられると、松風の音を立てるのと、全く同じでございます。……が、この壺には世にも怪あやしい、一つの伝説がまつわつて居ります。よろしければお話し致しましょう」

「聞きたいものだ、話してくれ」海舟も延太夫も膝を進めた。

「では、お話し致しましょう」

尚古堂は話し出した。

戦国時代の物語である。

甲州には武田家が威を揮ふるっていた。その頃金兵衛という商人があつた。いわゆる今日のブローカーであつた。永えい禄ろく四年の夏のことであつたが、小諸こもろの町へ出ようとして、四阿山あずまの峠へ差しかつた。そうして計わらずも道に迷つた。と、木の陰に四五人の樵き夫こりが、何か大声で喚わめいていた。近寄つて見ると彼らの中に、一人の老人が雑ぼろっていた。襪はを纏まとつた乞食風ではあつたが、風貌は高朗こうろうと気高かつた。その老人がこんなことを云つた。

「ここに小さな壺がある。が、普通の壺ではない。摩訶まか不思議ふしぎの仙人壺だ。そうして俺は仙人だ、嘘だと思ふなら見ているがいい。

この壺の中へ飛び込んで見せる」

それから老人は立ち上り、一丈じょうあまりも飛び上った。と、体が細まりくびれ、煙のように朦朧となり、やがてあたかも尾を引くように、壺の中に入って行つた。

「見事々々！」と樵夫どもは、手を叩いて喝采したが、物慾の少ない彼らだったので、そのままそこを立ち去つた。

よろこんだのは金兵衛で「こいつを香具師やしに売つてやろう。うん、一ひと釜かま起おここせるかもしれねえ」壺を抱えて山を下つた。

さてその晩旅籠はたごへ泊まると、早速怪奇が行なわれた。壺が音楽を奏したのである。金兵衛はどうとう癡狂した。旅籠の主人は仰天し、この壺を役人へ手渡した。それを聞いたのが勝頼かつよりで「面

白い壺だ、持って来るがいい」

で、その壺は勝頼の手で大事に保管されることになった。大たいご

豪うの武田勝頼には、仙人壺たも崇たらなかつたらしい。いやいや決してそうではなかつた。壺は大いに崇たつたのである。ある夜壺は音楽を奏した。これが勝頼にはこんなように聞こえた。

「天目山てんもくざんへ埋める！ 天目山へ埋める！」

さすがの勝頼も気味悪くなり、侍臣じしんをして天目山へ埋めさせた。しかし崇たりはそればかりではなかつた。

天てんしょう 正 十年三月における、武田と織田との合戦で、勝頼は散々に敗北した。で止むを得わず僅ずかの部下と共に天目山へ立籠たつた。すると、にわかには鳴動が起こり、壺が地中から舞い上り、同時に

天地は晦冥かいめいとなった。

勝頼はその間に切腹し、全く武田家は亡びてしまった。

「と、こういう伝説でございますので。……その後手に入れた綱つな

吉公なよしが、將軍職になりましたし、柳沢侯が出世しましたので、

幸福の象徴となりましたが、しかし將軍綱吉侯は——大きな声では云えませんが、奥方の寢室ねやの中で暗殺され、つづいて柳沢侯は失脚しました。やはりこの壺はそういう意味から云うと、悪運の壺なのでございます」

家へ帰つて来た延太夫は、早速女房のお錦を呼んだ。

そうして勝家かつげでの話しをした。

「恐ろしい壺でございますことね。で、その壺はどうなさいました」

「伯爵様がお壊こわしなされた。別に変事も起らなかつた。ところで地図はどうしたえ？」

「壺に附いていた地図ですね。……ええここにございますわ」お錦は手文庫から取り出した。

「こんな物は焼いた方がいい」

延太夫は火をつけた。すると、火熱に暖められた地図おもての面へ文字んじが浮かんだ。

そこで急いで火を吹き消した。

こう紙面には記されてあつた。

「紫錦しきんよ、わしは「爺とつつあん」だ。これはお前への遺言だ。そう

してお前はわしの子だ。わしの本名は藤九郎だ。その頃わしは悪党だつた。わしは宝壺を盗み出した。だが、ちつとも幸福ではなかつた。その後釜かまなし無の中洲へ埋めた。そこで改めてお前へ云う、お前はわしの実の子だと。女房お半の産んだ子だと。その頃わしは諏訪にいた。伊丹屋の借家に住んでいた。その時伊丹屋でも女の子を産んだ。そこで俺は考えた。ひとつ子供を取り代えてやろうと。これは親の愛からだ。お前がわしの子である以上は、一生出世はしないだろう。しかし伊丹屋の子となつたら、どんな栄華

にでも耽ることが出来る。そこで、わしは取り代えた。勿論伊丹屋では気が付かず、お染と名を付けて寵愛した。そうして本当の伊丹屋の子は、わしらの手で育てようとした。ところが二日目に死んでしまった。さて万事旨く行った。ところが神様の罰があったり、わしは迂闊うつかりその秘密を「釜かまなし無の文ぶん」めに話してしまった。文は宝壺をよこせと云った。だがわしは承知しなかった。そこで文めは仇をした。お前——即ち伊丹屋のお染を、鼬いたちを使って盗み出し、そうしてお前を女太夫に仕込み、そうしてわしから身を隠した。わしはどんなに探したろう。だが容易に目付めつからなかつた。長い年月が過ぎ去った。と、偶然お前に会った。するとどうだろ。うわしの子は、また伊丹屋の養女となって立派に暮らしているで

はないか。わしはすっかり満足した。もうわしは死んでもいい。どうぞ立派に暮らしておくれ。……さて例の宝壺だが、これは吉つきよう凶つきよう両面の壺だ。悪人が持てば崇たりがあるが、だが善人が持つ時は、福德円満を得るそうだ。可愛い可愛いわしの娘よ、どうぞ心を綺麗に持って、よい暮らしをしておくれ。そうして地凶たを手た頼よりにして、釜無川の中洲へ行き、宝壺を掘り出すがいい」

読んでしまうと二人の者は、互に顔を見合わせた。意外な事実
に驚いたのである。

「それでは気味の悪かったお爺さんは、妾わたしの實の親だったのかねえ？」

お錦の感慨は深かった。

「そのお父さんはどうしたろう？」

そのお父さんはとうの昔に、病気でこの世を去っていた。

そうして現在の二人にとっては、宝壺などは不必要であった。
なぜというに今の二人は、充分幸福だからである。

青空文庫情報

底本：「国枝史郎伝奇全集 卷一」未知谷

1992（平成4）年11月20日初版発行

初出：「太陽」博文館

1925（大正14）年7月～12月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：阿和泉拓

校正：湯地光弘

2005年2月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

大捕物仙人壺

国枝史郎

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>